【グラビア】　ピアノ部会《華麗なる響宴 2014》

2014 年 6 月 13 日（金）東京オペラシティリサイタルホール

出演者全員による　開演前の記念写真　　撮影：高島和義氏

① 廣瀬史佳　ベートーヴェン「月光」ソナタ

②小島佐和子(Vl.)、上埜マユミ(p),片岡香織(Vc.)
メンデルスゾーン p 三重奏曲 op.49 第 1 楽章

③小崎幸子　プロコフィエフ　ソナタ第３番

④太田恵美子　フォーレ「ノクターン」第６番

⑤中村靜香（Vl.）／深沢亮子（P.）
ドビュッシー：　ヴァイオリンソナタ.

⑥八木宏子(P)／信田恭子（Vl.）
シューマン：３つのロマンス　Op.94

⑦栗栖麻衣子　ショパン：バラード　第１番

⑧原口摩純　ラヴェル：「道化師の朝の歌」

⑨戸引小夜子：助川敏弥「山水図」　他

⑩北川曉子　リスト「スペイン狂詩曲」

※写真撮影はすべて高島和義氏

第 561 号

音楽の世界

目　次

ｸﾞﾗﾋﾞｱ　ピアノ部会　【華麗なる響宴　2014】　2

論壇　敢えて問う～オペラは原語上演か訳詞上演か？　中村 敬一　4

特集　オペラ（音楽ドラマ）の世界

オペラの新たな可能性を求めて　中島 洋一　7

私とオペラ　助川　敏弥　12

海外リポート　スペイン、ベルリン、ウィーンを旅して(前編)　深沢 亮子　16

リレー連載　未来の音楽人へ(16)　藤村 記一郎　24

ｺﾝｻｰﾄ･ﾘﾎﾟｰﾄ　COMPOSITIONS 2014　北條 直彦　29

連載

歌の道・我が音楽人生 (7)　久住 祐実男　32

音・雑記ーひなの里通信ー (70) ・・・・・・・・・・　狭間 壮　34

名曲喫茶の片隅から (51) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・　宮本 英世　36

音 盤 奇 譚 (56) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　板倉 重雄　38

人･アート･思考塾(5)　小西 徹郎　40

電子楽器レポート・連載－17 【日中電子オルガン交流音楽】

—上海音楽学院に見る中国の電子オルガン界—　阿方 俊　42

コンサート評　邦楽コンサート聴き歩き　高橋雅光　44

コンサートプログラム

CMDJ2014 年オペラコンサート『愛の悲劇再び』　46

訃報　ロリン・マゼール　55

CMDJ 会と会員の情報　56

論　壇

敢えて問う～オペラは原語上演か訳詞上演か？

オペラ演出　中村　敬一

字幕付きの上演が当たり前になった。

劇場に字幕の装置が取り付けられている劇場も増えたし、パソコンとプロジェクターでプレゼンテーション・アプリケーションを使い、手作りで字幕を投影するなんて20年前には想像できなかったことも可能となった。

現在、日本ではこの字幕投影システムは、舞台のサイドや上部に、電光掲示板を設置したり、プロジェクターなどによる投影をするのが一般的だが、すでにニューヨークのメトロポリタン歌劇場など、海外の劇場では、前の座席の背に液晶で表示して、それぞれの客席ごとに言語の選択も可能になって字幕を享受することすら可能になっている。また将来的にはメガネのような装置をつけるとその視野の片隅に字幕が見えるようなシステムも、開発されている。

このような字幕システムの技術の普及によって、東京などの都市圏のみならず、日本各地で「字幕付き原語上演」と云う公演が大半を占めるようになった。

メトロポリタン・オペラでは独自開発したメト・タイトルズという、同時字幕システムが導入されている。現在は英語とドイツ語、スペイン語の表示が可能となっている。

若い人には想像もつかないだろうが、かつてはイヤホンガイド（鑑賞するとき、イヤホンを通して流れる、わかりやすい解説。また、そのための機械。）でオペラを鑑賞したり、外来のオペラの公演では、ロビーで対訳を販売していて、それを購入して、休憩時間に斜め読みした話しなど、まるで夢の話しのようだろう。

こういった字幕の普及と技術の進歩は、多くの観客に受益されるようになった。そして、誰もが「作品は作曲されたオリジナルの言葉

で聞くのが、最高であり、日本語の訳詞公演では、作曲家の音楽の良さが伝わらない」と口にするようになった。

確かに「オリジナル原語での上演が素晴らしい」という理屈は、疑問を挟む余地は無いのかもしれないが、オペラ演出家として、新国立劇場の開場前から、公演の原語上演を推し進め、字幕の制作に携わり、教育の現場で、原語での上演に必要なノウハウを若い歌い手たちに指導を推し進めてきた僕自身だが、しかし、日本中が原語上演になり、訳詞上演が減ってしまったことに、少しばかりの不安と危惧を覚えざるを得ないのだ。

新国立劇場の誕生が現実味を帯びるまでは日本語の訳詞上演が中心だった日本も、開場が間近に迫るに従って、原語上演に急激にシフトしてしまった。なんと、新国立劇場の学生向けの公演も字幕付き原語上演になってしまった。でも、それが本当に在るべき姿なのだろうか？　各地で行われる「市民オペラ」も、字幕付き原語上演が当たり前となった。

原語上演が、各地で可能になり、そのための字幕の技術が格段に進行したことは喜ばしいことだが、問題は、観客の 9 割以上が理解不可能なイタリア語やドイツ語でのオペラを全て字幕を目で追って鑑賞する方法だけが、最善の方法なのかという疑問だ。実際の公演でも、字幕でその情報が出たとたんに客席から笑いが起こる、例え歌い手がその内容を口にしていなくても、あるいはその演技をしていなくてもだ。

歌舞伎の鑑賞教室でも、字幕システムが大活躍している

現在でも海外では、同じモーツァルトのオペラを観るにしても、例えばメトロポリタンに行けば、世界一流の歌い手が原語で歌い、字幕でその意味を享受できるが、ニューヨーク・シティ・オペラへ行けば、英語でのモーツァルトを楽しむことができる。ウィーンなら、シュターツ・オーパーとフォルクス・オーパーが、ベルリンならドイチュ・オーパーやシュターツ・オーパーとコミッシュ・オーパーがその役割を分担している。パリならガルニエとコミーク・オーパーとが。原語のオペラと現地語のオペラを提供する。これが、両輪のように機能しながら、最先端を求める

マニアックなファンと初心者や年配書のファンとの両方の満足を充たしている。現在でも欧米ではオペラの原語上演と現地語上演が劇場やプロダクション、観客層によって、選択され行われているのだ。理解の出来る現地語の歌と台詞に、その場で涙し、笑うというのは極めて当たり前の劇場の魅力のはずだ。

日本で、急激に原語上演が増えたのも、敢えて批判を怖れずに云うなら、オリジナルの再現を目指した芸術的な観点だけでなく、スター歌手を世界各地から呼び寄せ上演することを可能にするための方法だったのではないか？　つまり、それぞれの土地でそれぞれの土地の歌い手で、上演されるオペラには、現地語上演のオペラが不可欠なのではないか？

音楽現代

2014 年 8 月号　　定価 840 円

♪特集 ＝鎮魂の夏～大作曲家の死：その病と音楽の関わり
♪特別短期連載 ＝生誕 100 年記念～フェレンツ・フリッチャイ著「モーツァルトとバルトーク」～弦楽器・管楽器のコンチェルト
♪特別記事＝「佐村河内氏問題」をめぐって
♪カラー口絵
・ローマ歌劇場「シモン・ボッカネグラ」、「ナブッコ」
・京都・国際音楽学生フェスティバル
・第 16 回別府アルゲリッチ音楽祭
・第 19 回宮崎国際音楽祭
・関西二期会「こうもり」
・バーデン＝バーデン復活祭音楽祭
・ヴァレンシア音楽祭
♪インタビュー
アンドレアス・メーリッヒ＝ツェプハウザー、
木戸敏郎、宮本文昭、
石多エドワード＋クリストファー・マクマレン、他

〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11
TOMY ビル 3F
芸術現代社　TEL3861－2159

新国立劇場の開場の 1997 年以降、急激に日本語の訳詞上演が減ってしまったが、その 15 年の間に忘れ去られた日本語歌唱のノウハウや訳詞作りの方法論は、「失われた 15 年」として、やがて、オペラの新しい観客を開拓するのを阻害する問題として我々にのしかかっては来ないか？　「上演は原語を望まれますか？　日本語ですか？」と云う問いに何の躊躇いもなく、「原語」と云っていた僕は、昨今、日本語の訳詞作りと、次代の歌い手に対しての日本語歌唱の手引きに精を出している。

（なかむら・けいいち　オペラ演出家）
（国立音楽大学客員教授・大阪音楽大学客員教授、沖縄県立芸術大学講師・大阪教育大学講師）

特集:オペラ（音楽ドラマ）の世界（1）

オペラの新たな可能性を求めて

作曲：中島洋一

私と劇音楽との出逢い

実は、私が初めてオペラを鑑賞したのは、小学校３年の夏のことで、８歳の時であった。音楽好きの実母に連れられて、夏休みに東京の親戚の家を訪れた時のことであったが、姉、そして母と同じく音楽好きだった叔母の四人で、旧日比谷公会堂で『トスカ』の舞台を観た。私がいくらかは音楽的素養のある子供だったとはいえ、８歳の子供にとって、オペラ鑑賞は退屈でしょうがなかった。それでも、幕間になると、母がストーリーを説明してくれたので物語について少しは解出来た。今でも、スカルピアがトスカに刺されるシーンと、カヴァラドッシが銃殺されるシーンは記憶に残っている。トスカを演じたソプラノは若き日の砂原美智子だったと思う。他の配役についてはまったく憶えていない。

高校生になると、劇音楽に興味を持ち始めたが、なにせ片田舎に住んでいたため、せいぜいテレビやラジオで接するだけであった。その頃は舞台を伴う音楽様式は、反って聴き手の想像力の広がりを妨げるような気がして、ベルリオーズの『ファウストの劫罰』や、表題付きの『幻想交響曲』のように、舞台を伴わないドラマチックな作品に惹かれた。しかし、高校２年か３年の頃だったと思うが、テレビでシミオナートの演ずる『カルメン』を鑑賞した時には、その魅力に圧倒され、テレビの前に釘付けとなった。

18 歳の時、東京の音大に入学してからは、生のオペラを鑑賞する機会が持てるようになったが、金銭的な理由もあり、決して頻繁に劇場に足を運んだ訳ではない。ただ、オペラを含め、音楽ドラマ全般に対して親しみを感じ、LP や FM 放送を通しで、ワーグナーや、ドビュッシーなどのオペラ作品、そして三善晃の音楽詩劇『オンディーヌ』などを聴き、また楽譜もかなり買い込んだ。

私は、決して熱心なオペラファンとは云えなかったが、当時から純音楽より、劇音楽の方に関心と親近感を抱いていた。音大の教員であった 35 歳の頃、自作の台本による学生向けのメルヘン・オペラを作曲したが、その時、オーケストラの編入楽器として使用した電子楽器の可能性に興味を覚え、それをきっかけとして大学で電子音楽を研究するようになった。しかし、私が強く興味を抱いたのは、1950 年代の実験的で無機的な電子音楽ではない。私が研究を始めた 1980 年代の頃になると、電子機器は急速に進化し、この世に存在する様々な音を取り込むことが出来るようになった。私が興味を抱いたのは、電子音響の導入がもたらす、音楽表現の可能性の拡大だった。例えば、空襲で焼け出された人々の阿鼻叫喚の声、爆弾の破裂音、そのような楽器演奏では得られない音響まで取り込むことが出来、その結果、いままでに為しえなかった表現の創出が可能になる。しかし、私には生楽器の演奏が創り出す音楽を排除しようという意識は毛頭なかった。生の楽器や人声には、そこから

しか得られない音楽表現の世界があることは、ずっと音楽に携わって来た私には当然のことながら良く判っていた。

私は電子音楽を表現媒体とした場合、純音楽の分野より、舞踊など他の芸術ジャンルとのコラボレーションによる芸術創造の分野に、より幅広い芸術表現の可能性を見いだせると考え、舞踊と電子音楽のための作品をいくつか創作している。

しかし、晩年というべき年齢に達したいまは、電子音より再び生楽器や人声の響きにより親近感を抱くようになった。また劇的作品においては、言葉の持つ広く深い表現の力に、昔にまして強く惹かれるようになった。私の半生は創作面においては試行錯誤の繰り返しだったといえるが、自分自身が求め続けて来た私自身の劇音楽の創造を決して諦めてはいない。

オペラコンサートの開催と我々がめざすもの

日本音楽舞踊会議のオペラコンサートも今年で９回目を迎えるが、私がこの企画を立案した理由は、様々な様式のコンサートを開催している本会でありながら、純音楽に比べ劇音楽の比重が軽すぎると思えたこと、また我が国の音楽愛好者に対してもっと手軽で親しみ易い方法でオペラを提供し、我が国におけるオペラ愛好者の層を厚くしたいという思いがあったからである。しかし、実現に向けていくつかの障碍があったが、2003 年からフレッシュコンサートなど、若い音楽家のためのコンサートが開催され、オペラが歌える若い歌手を発掘出来るようになり、企画を具体化する条件が整って来たこと、佐藤光政氏、島信子氏、亀井奈緒美氏など会員の方々の強い支援と協力が得られたことなどにより、企画をスタートさせることが出来た。第１回目を開催した 2005 年 12 月の時点では、私はまだ現役の音楽大学教員で、生憎、公演当日大学で授業があり、ゲネプロに参加出来ず、関係者の顰蹙を買ったが、第２回目以降は専任教員だった音大を定年退職したため、企画を推進するための時間的余裕が出来た。そこで、日本語台本の作成、舞台音響などが私の分担となった。オペラに対する価値観、考え方は個々のスタッフ間でまったく同じというわけではないが、声が通りやすく、演技を間近で見ることが出来る小さめのホールで、お客さんにとって親近感のある舞台を創り出して行く、という基本的考えでは一致していた。また、台詞（セリフ）を入れることが出来る作品を好んで取り上げ、台詞は日本語で通した。歌唱部についてはイントネーションなどが不自然にならないよう原語歌唱を原則としたが、『メリー・ウィドウ』、『ヘンゼルとグレーテル』については、歌唱部においても日本語の訳詞を採用した。

我が国のオペラ界の「本場物志向」への疑問

我が国にも熱心なオペラ愛好家は少なからず存在する。どこの国でもオペラの愛好者は富裕層に属する人たちの割合が高いのであろうが、それでも、ウィーンのフォルクスオーパーでオペレッタを鑑賞した時の雰囲気などからは、より気さくで庶民的なものを感じた。我が国のオペラ・フアンの多くは本場物志向が強く、金と暇

のある人たちは、ウィーンのスターツオーパーや、ミラノのスカラ座、ニューヨークのメトロポリタンまで聴きに行く人も少なからず存在するようだ。お金があっても、それほど時間的ゆとりのない人たちは大枚をはたいて来日した外来オペラを聴きに行く。二期会などの日本人のオペラも鑑賞するだろうが、それらは外来オペラに比べ１ランク下のものと認識しているオペラファンも少なからず存在するようだ。

昭和の時代に建設が待望されていた新国立劇場（以下新国と略称）も、平成の世になり 1997 年には完成する。オペラの普及を視野にいれ、毎年「高校生のためのオペラ鑑賞教室」を開催したり、人材育成をめざして、オペラ研修所を開設するなど、有意義と思える活動をしてはいるが、オペラ劇場の本公演では、主役クラスの多くは、外国人歌手を採用し、折角育てたオペラ研修所の修了生は、せいぜい端役しかあてがわれないことが多いようだ。西洋のオペラ作品を大きな劇場で上演する限り、声量、体格に勝る外国歌手に主役の座を譲らざるをえないのは、あるいはやむをえないことなのかもしれないが。

しかし、声がそれほど大きくなくとも、声が通りやすい小スペースでなら、声の美しさ、表現の繊細さ、奥の深い演技力でお客を魅了出来る日本人歌手は少なからず存在するのではなかろうか。そういう考えもあって、新国のオペラ劇場の公演とは正反対のスモール・オペラを掲げて、毎年公演を続けている、

もう一つの疑問は、昨今の字幕スーパーつき原語公演スタイル一辺倒の風潮に対してである。確かに日本語の訳詞で歌うと、原作の音楽的魅力を損ないかねない作品もある。ずっと昔、ワーグナーの「マイスタージンガー」の日本語訳公演を聴いた時、当時は字幕スーパーなどなかったが、それでも原語公演の方がずっとましだと思った。ドビュッシーの『ペレアスとメリザンド』も日本語で公演されたことがあったが、この作品は歌唱パートの音程の抑揚幅が小さいせいもあってか、日本語で歌ってもそれほど不自然に感じられなかった。

話題を字幕スーパー付き原語公演に戻そう。たとえ原語公演の方が作曲者の音楽表現をより忠実に再現出来るとしても、鑑賞者が字幕スーパーに気をとられすぎると、肝心の音楽表現や演技に集中出来なくなってしまう恐れがある。ところで新歌舞伎座では、前の座席の後に、演目の解説などを文字表示することが出来るらしいが、私はそのシステムを一度も利用したことがない。そんなものを読んでいては、精神を舞台に集中することが出来なくなるからだ。歌舞伎の場合は、日本語なので、作品を知っていれば、字幕の解説は不要である。しかし、オペラの場合はそうは行かない。では、どうしたらよいのだろうか。

翻訳劇がもたらしたもの

新劇の世界では、日本の戯曲作品に混じり、それと劣らぬウェイトで翻訳劇が上演される。希にロイヤル･シェイクスピア・カンパニーなどが来日し、シュエイクスピアの戯曲が原語で上演されることもあるが、翻訳劇として上演される機会の方が遙かに多い。中には、東山千栄子が 300 回もラネーフスカヤ夫人役を演じたチェー

ホフの『桜の園』や、杉村春子が 30 年以上もブランチ役を演じた、テネシー・ウィリアムスの『欲望という名の電車』のように、特定の俳優が当たり役を得ることで、より広い観客層を獲得した作品もある。

ところで、日本語で演じたチェーホフは偽物だろうか。そうではなかろう。日本人が日本語で演じても、チェーホフが描いた世界は壊されないばかりか、さらにより繊細な心理描写などが加味されて、日本的にリアレンジされたものとなるのではなかろうか。そうすることにより、チェーホフの戯曲は我々日本人とって、懐かしく愛おしい作品として消化され受け継がれて行く。翻訳劇は芸術的にみると、再現と創造の中間に位置するような存在ではなかろうか。そして、それは新たな創造の種さえ播いて行く。たとえば三好十郎の『炎の人』は、作者が画家ゴッホの絵や手紙から強いインパクトを受け書き下ろした作品であるが、劇中のゴッホとゴーギャンの激しいやりとりは翻訳劇を彷彿させるものがある。しかし、ゴッホを通して描かれた人物像には「人は（自分は）かく生きたい」という日本人三好十郎の熱い思いが込められている。

ニセモノの本場物と、本場物でないホンマモノ

「字幕付きスーパー＋原語公演こそ、作曲家が描いた世界を伝える最善の方法」という思考には落とし穴がある。音楽芸術とは創造、再現（演奏）、受容（鑑賞）の三者が相互に関わり合うことで、成り立つものだからだ。

また、ドイツ語の習得が不十分な日本人歌手がドイツ語で歌ったとして、一つ一つの言葉にそれに相応しいニュアンスを込めて表現することが出来るだろうか。逆に翻訳劇のチェーホフを演ずる俳優は、慣れ親しんだ日本語で言葉の意味を深く噛みしめ、台詞を唱えることが期待できるであろう。

つまり原語で歌ってはいるが、魂の通わないニセモノだったり、日本語にアレンジされており本場物（原語）ではないが、表現は魂が通ったホンマモノ（本物）だったりするということもありうるのだ。たとえ「原語公演こそが作曲家が創造した世界を最も忠実に再現する方法」という説は認めるとしても、字幕スーパーに気をとられ、歌い手の声や演技に心を集中させることが出来なかったなら、作曲家が心に描いた世界がはたしてその聴き手の心の奥底に届くであろうか。

勇気をもって様々な道を歩んでみよう

日本のオペラ愛好者の多くが、「字幕スーパー付き原語公演こそが王道」という思考に取り憑かれているとしたら、そこに我が国のオペラ鑑賞の土壌の浅さが示されていると云えないだろうか。オペラ作品、そして公演形態が多様であるように、その楽しみ方も本来より多様であってよい筈である。大きな劇場で上演される大がかりなグランドオペラもあれば、我々のように、「スモール・オペラ」を旗印にした公演もある。字幕スーパー付き原語公演もあれば、日本語の訳詞による公演もあ

る。聴き手は様々な公演を体験し、自分に適合した鑑賞スタイルを探して行けば良い。

我々の会では、来年度はドボルザークの『ルサルカ』の日本語公演を計画している。歌い手にとって、まったく意味の分からないチェコ語で歌うより、一つ一つの言葉のニュアンスを噛みしめることが出来る日本語で歌った方が、聴き手の心を捉える歌が歌えるのではないかという想いから、全曲を日本語で通すことにした。また、原作には台詞だけの部分はないが、原作をリアレンジして、台詞の部分を加え、音楽劇風にまとめ上げている。翻訳劇の章で、再現と創造の中間に位置するものという喩えを用いたが、オペラの世界にも、そのような試みがあってもよいのではないかと考える。ドボルザークの作品をリアレンジすることで、作品が内包する新たな魅力を引き出したと評価されるか、ドボルザークの作品をズタズタに引き裂きダメにしてしまったと評価されるか、そのどちらの可能性もありそうだが、成功しても、失敗しても、将来に向けてなんらかの良い種となるものを得たいと考えている。

創作オペラの可能性について

團伊久磨のオペラ処女作『夕鶴』を鑑賞した時、日本的情感が漂う美しい作品だが、日本版プッチーニという印象を強く受けた。以後の作品において、作曲者はその殻を破るべき試みを重ねたが、皮肉にもごく若い頃書いた『夕鶴』のみが、いまだに最も上演回数の多い作品となっている。

我が国には、歌舞伎、能、文楽など西洋のオペラとは様式、表現の質において異なる総合芸術が存在する。何も、それらの要素を取り込み、西洋のオペラに対抗する作品を作ろうなどと力まなくとも、我が国独自の総合芸術を育んだ感性は、我々の心の中に残されていると思う。

私が構想する音楽ドラマは、イタリアオペラのように、ソリストの声量と歌唱力に依存し過ぎるのではなく、合唱、重唱などのアンサンブルを多く取り入れ、音楽と台詞で紡いで行く音楽劇のようなものである。私はその作品をオペラとは呼ばず「音楽童話劇」と名付けている。

これは、私個人の計画だが、一見不毛に見える、現代オペラ（音楽ドラマ）の創造について、既成の価値観や概念の呪縛から心を解き放つことが出来れば、多様な可能性が開けてくるように思える。新しい創造のヒントとなるべきアイディアは、既成のオペラ作品をリアレンジする行為の中からも、見つけ出すことが出来るかもしれない。

（なかじま・よういち　CMDJ オペラコンサート実行委員長）

特集:オペラ（音楽ドラマ）の世界(2)

私とオペラ

作曲　助川敏弥

本誌の六月号に書いたが、私は自分の作品をピアノ曲に集中しているように、性格からして北国生まれ独特の、内向的で、およそ派手なことが苦手な性格である。オペラのような華麗で複雑多様で規模がおおきく多元的な世界は体質としてはなじまない。にもかかわらず、私はオペラについてある経験を持ってしまった。詳しくはこれもまた以前に本誌に回想記として書いてしまったが、少年時代のはからずも遭遇してしまつた経験のなりゆき上、オペラを身近に知ってしまったのである。オペラについてはその経験から発して書くほかない。

まず、日本にはオペラの歴史がない。なかった。明治になり突如として西洋文化と音楽をとり入れたのだからこれは仕方がない。西洋の音楽は、演奏会とオペラと、二つの場において成長してきた。その歴史的経過を持つのに、日本にその構造がなかった。オペラは演奏会とは違い、劇場と演劇、舞踊、美術その他もろもろとの総合であり、多種多様な贅沢な要因からなっている。芸術的にも経済的にもこの異国文化のとりいれは困難をきわめた。とはいえ、明治大正以来、諸先輩たちのたいへんな努力のおかげで、いまでは日本のオペラもかなりの水準まで到達した。しかし、それは演奏水準についてであり、作曲の方ではいまだに基本概念の上での勘違いと推察される疑問が残るものに出会う。まことに残念である。ほかの分野ではすぐれた実績を持つ作曲家がことオペラではこの状態がいまだに現実である。オペラについて書くとすればこの部分から話を始めるほかない。

オペラへの勘違い

先輩同輩の仕事を対象とすることは望むことではないが、オペラの概念がまず勘違いされている作品に出会うのがいまだに実情である。

日本では、オペラとは芝居に音楽がついたもの、という間違った観念があるとしか思えない。

オペラは芝居に音楽がついたものではない。「演奏会形式」の演奏というのがある。オペラは、音、つまり音楽だけで成立する。オペラとはそういうものである。オペラは芝居に音楽がついたものではない。音楽だけで充分に持続が成立するもので、そうでなければならないのである。現代文学の話題作に音楽を少しばかりつけて、舞台装置と演技演出をつけて、オペラが出来るように間違えたものに出会うことは詠嘆に耐えない。異国の文化を取り入れることがいかに困難であるか、ひたす

ら慨嘆する。私の見解では、團伊玖磨さんの「夕鶴」だけがオペラの条件を心得て作られた作品である。

私のオペラ体験

ここまで書くと、かくいう私のオペラ体験について書かなければならない。これも過去の本誌掲載文の重複になるが仕方ない。

戦後間もなくのこと、私は上京直後、同年輩の友人から帝劇での新作バレエ曲のオーケストラ内のピアノの演奏を頼まれた。オーケストラはいまの東響、当時の東宝交響楽団である。それが縁で、藤原オペラの「ファウスト」の練習にかかわった。会場は帝劇であった。とはいえ、どうかかわつたか今思い出せない。ピアノをひいたわけではない。多分、いくらかの手伝いと舞台見物が目的であったのだろう。私は当時まだ成人の誕生日を迎えていなかった。１９歳である。マルガレーテは砂原美智子さん、フアウストは藤原義江先生、メフィストはアメリカ人だった。日本での本格的オペラとの私の最初の出会いである。

マルガレーテが、脱獄の誘いをしりぞけて天国に昇っていく終幕の素晴らしさに感動した。合唱が聞こえ、舞台の照明が牢獄の暗い光景から次第に天国の明るく厳かな雲がたなびく場面に変り、天使の合唱がいよいよ高く響く。私のオペラ感動の初めであった。当時は戦後まもなくである。この公演以前に、私の上京前に「タンホイザー」の上演があり、舞台と衣裳の貧しさが酷評されていた。私は当時まだ地方都市にいたが、新聞雑誌などでその酷評を読んでいた。そういう時代であったろう。しかし、「ファウスト」は違った。貧乏くさい所はまったくなかった。わずか数年の間に戦後の社会復興はずいぶんと進んだものと思われる。

オーケストラの中で

さて、それから、こんどは、「カヴァレリア　ルスティカーナ」と「パリアッチ」の公演でオーケストラの中のピアノを頼まれた。当時、ハープは人も楽器もなかったとみえて、ハープのパートをピアノでひいたのである。そのハーブ代理ピアノをひくことになった。公演は名古屋、藤原オペラ団、東宝交響楽団、指揮はグルリットだった。練習所での「カヴァレリア」の「復活祭の合唱」は圧倒的だった。それから、しばらくして、「蝶々夫人」を頼まれた。これは四国、中部、九州、という遠出で、やはり、藤原オペラと東宝交響楽団、グルリット。この時の体験はすさまじいものだった。私はそもそもドイツ系の先生に指導された。終戦直前にベルリンから命がけで帰国された荒谷正雄先生が育ての親で、ベートーヴェン、バッハが尊敬の対象という勉強で育ってきた。そもそもが、フルトヴェングラー指揮のベートーヴェンの「第五」のレコードを聞いて音楽の道に入ってしまった少年だった。そ

ういう出自である。ドイツ音楽の精神的迫力が音楽の源泉と心得ていたのである。それが、プッチーニではまったく違う音楽の世界があることを知ることになった。第一幕終りの「愛の二重唱」の盛り上がりはすごかった。これはドイツ音楽の精神主義とはまったく別のものである。フランス音楽の感覚主義とも違う。ロシア音楽の土俗的迫力とも違う。日本ではいまだにイタリア・オペラの魅力は美しい芳醇な旋律であるという通説俗説がある。これはまったく間違いである。イタリア　オペラの魅力の本体と源泉は旋律にあるのではない。和音にある！日本では、これはいまだにわかっていない人がいる。ただ客席で聞いたり、レコード、放送で聞いたりしてはこの経験にならない。オーケストラの真っただ中にいて圧倒的な音の洪水におぼれそうになりながら聞いた、いや、波に翻弄された。

和音の威力

私はこの時、芸大作曲科の受験勉強の最中であった。恩師、池内友次郎先生はその学習要綱を生徒にあたえていた。その中で、自らのパリ音楽院での学習の成果を日本に移植することをもって自分の天職とすると書かれていた。そして、「和音、和声は、歴史的に日本に存在しなかった。したがって、日本の作品はいずれも和音和声において救いがたい貧困を露呈する」と書かれていた。プッチーニ体験で衝撃を受けた私は、まさにこのことを実感として知ったのである。知ったと思わざるをえない体験をしてしまった。「愛の二重唱」では、オーケストラ全体が陶酔状態になり、指揮のグルリットもまた酔ったように指揮をしている。曲の頂点に至ると歌もオーケストラも恍惚と陶酔の極致で爆発的な瞬間にいたる。どんな名旋律でも旋律だけ聞いてもこんな陶酔感は生まれない。和音というのが途方もない表現力を持っていることを私は全身で思い知らされた。

それから・・・–
「夜間飛行」の初演

５０年くらい前のことになるか、ダラピッコラのオペラ「夜間飛行」-Volo　di Notte が東京で初演された。会場は日比谷の旧第一生命ホール、多分二期会の公演だったと記憶する。栗林義信君が主役を演じた。オペラであるから主役を歌ったといいたいところだが、歌らしい歌がない。演じたという言い方しか実感がない。演奏と上演自体はかなり上等なものであったのだろう。しかし、藤原義江先生が来られて言われた。「なかなかよく上演されている、しかしね、オペラというものは、もっともっと贅沢で豪華で楽しいものだよ」と。これは通称「現代」オペラに対する深刻にして本質をついた一言であったろう。

「現代」オペラと称するものがどういうものになっていったか。知る人は知る通りである。これは、オペラだけでなく、通称「現代音楽」すべてについて言えるこ

とで、音楽の中から、楽しさ、豊さ、聴く楽しみを追い出した音楽の破壊であった。いかなる呪文によりかような自殺行為が世界に蔓延したのか。現代作曲家のオペラは、ベルカントと芳醇な和音を追放して「問題意識」だけが残る奇奇怪怪なものに成り果てた。はじめに書いた現代日本の作曲家によるオペラの定義の勘違いも、はじめからこの「現代」脱線オペラを前提としてそこから出発していたのかもしれない。

それでは、在来の豊かなオペラはどこへいったのだろう。大西洋を渡ってニューヨークへ胞子が飛んだ。ブロードウエイ・ミュージカルである。フリムル、フレデリック・ロウ、そしてリチャード・ロジャース。「贅沢で豪華で楽しい」オペラの伝統は場所を移して海の向こうで花を咲かせた。フレデリック・ロウの「マイ・フェア・レディ」は、ウィンナ・オペレッタの系列そのままである。ロジャースの「回転木馬」のなかの「if I loved you」は格調の高さとベルカントの魅力で永いオペラの歴史の美点を継いでいる。かつて、黛敏郎さんが、「題名のない音楽会」で、「ブラームスを思わせる格調の高さ」と評した。

通称「現代オペラ」はどこへいく
レイボヴィッツの言葉

しかし、このニューヨーク・ミュージカルもやがて変る。ロック時代が始まった。旋律、和声、リズムの三つの要素ではなくビートを主体としたロックがミュージカルの世界まで進出してきた。バート・バカラックという人が情緒感傷、感情がない歌を作り出した。この先、どうなるのだろうか、私には見当もつかない。かつての時代を知る世代も替り、私たちの世代とは好みが違う人たちの時代になっていくのだろう。

シェーンベルクの十二音音楽の旗手であり伝道者であったルネ・レイボヴィッツがかつて書いた。「ロマン派音楽を否定するものは現代の音楽を否定するものである」と。ロマン派に続く音楽はその直近の先祖であるロマン派から栄養をとって生まれる。直系の先祖であるロマン派音楽を否定する者は次世代の現代音楽をも否定するものである」と。前衛の旗手と思われているレイボヴィッツにしては意外に思われる発言である。しかし、これは正論である。オペラに限らず、すべての分野の現代の音楽についての直言である。人は、ある流れに流されると、自分で自分に呪文をかけ、聞きたくない言葉は聞かない、見たくないものは見ないようになってしまうらしい。右や左の思想に犯された人がどんな愚かな行為に走るか実例に見る通りである

（すけがわ・としや　本会　代表理事）

スペイン、ベルリン、ウィーンを旅して　（前編）

ピアノ：深沢　亮子

６月１４日（土）晴　前の晩は日本音楽舞踊会議ピアノ部会主催の演奏会がオペラシティリサイタルホールにて行われた。私は中村静香さん（Vn）と Debussey のソナタを弾き、その後他の方々の演奏もお聴きしたかったが、14 日の早朝ヨーロッパへ発つことになっていたので、残念ながら早目に失礼した。成田で同行する甥と落ち合い、11.20 時発 OS52 便に搭乗。ウィーン着 16.10 時の予定が 15.50 時に到着。1 時間余りの待ち合わせで次の OS393 便、17.15 時発のバルセローナ行きに乗る。無駄のない時間設定だ。（前の飛行機が遅れたら大変だったが）4 月 1 日から羽田よりルフトハンザが飛んでおり、私の家からは近いのだが、これだと München 乗り換えで 21.20 時着になる。（OS だと 19.40 時着）知人の本間美佐子さんが出迎えて下さることになっていたので、余り遅くなるのも申訳なく、又帰りもウィーン発を予定していたのでこの便にしたのだった。バルセローナに着くと美佐子さんが息子さんの健造さん（高校 1 年生、きれいな日本語を話し、剣道の選手でもあるそうだ）と空港で待っていて下さった。本間美佐子さんは陶芸家、ご主人様は公認会計士でスペインの方、彼女はもう 25 年余りこちらに住んでおられる。お母様は私と同郷で東金市のご出身、美佐子さんの妹さんはかつて私の生徒だった。今夜はご主人が御用でバレンシア近くまで行かれお留守とのこと。いつもの旅行会社、ジャックラビットで予約をしてくれたアバサンツホテルに荷物を置き、私達 4 人は街路樹の美しいランブラス通りを歩く。そこをぬけ、南方の樹の生い繁る広場のレストランでスペイン料理の数々―ゆでたムール貝、いかのリング揚げ、パエリア他―を頂いた。そこかしこに人が多く賑やかである。

私のここ 4，5 年続いた 6 月のヨーロッパ旅行の目的は、2010 年デュッセルドルフでのコンサートと、「緑の風」代表の武田和久・七七子夫妻とのクロアチア旅行、2011 年は福祉の町ベーテルの見学、2012 年はドイツのツヴィカウでの国際シューマンコンクール、そして昨年のウィーンに於けるベートーヴェン国際ピアノコンクールを聴くことが主の目的だったが、今回は自由。勿論好きな美術館巡りや音楽会、オペラを観聴きすることは私にとって大切なことなので、それは毎回の目的に入ってはいるが。スペインには 50 年程前バルセローナ、マドリッド、トレドに行ったが、大分昔のことだし、それに今回はアルハンブラ宮殿で有名なグラナダへどうしても行きたかったので少し遠方へ向かったのだった。欲を云えばイスラム文化の香り豊かなコルドバ、フラメンコの本場セヴィーリヤ他も見たかったが、日程の関係でグラナダのみに絞った。私はスペインの歴史にくわしくはないが、帰国したらこの国に関する本を少し読んでみようと思っている。

スペインは古い歴史をもち、イスラム、カトリック、ユダヤ教が入り混じり、独特の文化を形成してきた。「陽の沈むことのない大帝国」と呼ばれた国だが、長い間にはいろいろのことが起き、激動の繰り返しであったようだ。それ故に、ダイナミックで情熱的、多様性に富み、大きな流れの中スペインらしい豊かさが生まれたのだろう。以前私はショパンとジョルジュ・サンドが過ごしたマヨルカ島に行き、ついでにそこからアフリカの突端にあるタンジェを旅行したことがあった。早くからスペインはさまざまな国との交流があり、その中に又アフリカの影響もあるのではないだろうか。

１５日（日）　雨後晴　本間美佐子さんが朝 10 時前にホテルへ迎えに来て下さり、私達はまずモンジュイックの丘へ。1992 年、バルセローナ・オリンピックのメイン会場だった所だそうで、カタルーニャ美術館やミロ美術館他、見るべきものが沢山あるようだ。私たちはミロ美術館をゆっくり鑑賞。ミュージアムは細く幾つもの白い塔の様な形をした屋根が立ち並び、バルコニーへ出ると、バルセローナの街が一望に見渡せる。所々にミロの作った風変わりなオブジェ―赤く塗った女性の足の上にくっついた上半身のようなもの、大きなフォーク等が眼に飛び込んでくる。内部の展示品も沢山あり、最初の部屋には天井からのタペストリーが二枚飾られており、黒いこうもり傘が数本縫いつけてある。彼は終生自由奔放、子供のような好奇心をもち、赤や黄や緑等の鮮やかな色彩を楽しんでいたのだろう。絵画的であると同時にそこには詩があった。彼は様々な作品を創っており、絵画のみならず、ブロンズの彫刻、陶器、コラージュ、版画、繊維等に至るまでそのどれもが大変興味深かった。帰りはミロ美術館の下まで樹木の続く坂道を降り、美佐子さんの工房に立ち寄った。中には陶器を焼く電気ガマがあり、棚には沢山のお皿や壺が並べてあった。私は彼女が 20 年位前に東京で展示会をされた時求めた、ヒヤシンスのお花と、拡がった球根をデザインした薄いグリーンに赤茶色の混ったお皿が好きで、いつも居間の出窓に飾ってある。その頃とは大分作風が変化したようだ。お弟子さん達も多く、市からの依頼で毎週公開のクラスも受け持っておられるという。バルセローナのパセオ・デ・グラシア地区にあるランブラ

ホワン・ミロ美術館にて　本間美佐子さん（左）と

ス通りの有名な建物の壁のタイルが壊れ、その修復も彼女の仕事だったそうだ。電気ガマで焼き、美しい色彩のタイルで作られたお花は繊細な感覚に富んでいた。

こうした日本の方々の海外でのご活躍は本当に嬉しいものだ。お昼のお食事は2時頃だったが、彼女の家の近くのヨットハーバーにあるレストランへご主人が招いて下さった。他の日本人の奥様とお嬢さんを伴った友人の方もいらしていたが、皆さん陽気な方々で、初めてお目にかかったご主人も気さくな良い方だった。ここでは昨晩より更に美味なスペイン料理の数々とワインを堪能した。皮なしのトマトをつぶし、ペースト状にして、バターのようにパンに塗って食することも初めての経験だった。食後は本間さんのお宅へ。この家はバルセローナ・オリンピックの時、選手たちの住居だったそうで、近くに同様のものが幾つかあり、オリンピックの後に一般の人々に売ることを目的として作られたものだったそうだ。部屋は4〜5つあり、それを美佐子さんのご主人が買われたと云う。居間にはヤマハのグランドピアノが置かれていた。この楽器は昨年47歳の若さで亡くなられた妹さんのもので、日本から送られてきたそうだ。

修復された壁の前で　本間美佐子さん（左）と

カタルーニャの音楽堂内部

その有紀子さんのことを想いながら私は皆さんの前で助川さんの小品やモーツァルト、ショパンの曲を弾いた。夜は9.30時より有名な音楽堂で、フラメンコ、ギター、歌のコンサートがあり、美佐子さんと甥と3人で出かける。（私事で恐縮だが、甥は私の弟の次男、コンピューターで音楽を作る仕事をしているが、数人の方々から私一人でスペインを旅行するのは危険だと云われ、又、荷物持ちも兼ねて彼に同行してもらったのだ）途中ピ

カソ美術館にも寄ってみたが閉館間際で残念ながら入れず、ホテルで着替えをし、電車でカタルーニャ音楽堂へ向かった。このホールはガウディと並ぶ建築家、ドメネク・イ・モンタネールという人が作り、世界遺産にも指定されたという。ステンドグラス、モザイク、タイルが散りばめられ、他のホールでは類を見ない程特別な趣のあるものだった。会場はかなり広く（1600 位の座席）殆ど満席だった。各々ごひいきの舞踊家、音楽家がいるらしく聴衆は大いに湧き、大変な熱気。これがまさにスペイン！と感じたのだった。ホワイエには来シーズンの予告のポスターが張り出されており、アンネ・ゾフィー・ムターやマレイ・ペライヤ他の音楽家達の名前が見られた。

１６日（月）晴　朝 9.30 時に美佐子さんがホテルに来て下さり、ガウディ(1852-1926)が作り、世界遺産にも登録されたカサ・ミラの前を通り、サグラダ・ファミリア教会を訪れる。この教会こそがバルセローナのシンボルとも云われるもので、彼は教会二代目の建築家として 31 歳の時より活躍した。信仰心の厚い人だったそうだが、建築現場からの帰り、路面電車にはねられ、数日後に亡くなり、この教会に葬られていると云う。今も尚教会は完成されておらず、多くの人達が熱心に仕事をし続けている。中には日本の方もいらっしゃるそうだが、設計図も殆ど残っていない状態とか、その中での仕事はさぞ大変なことだろう。ガウディの大きな構想によるこの偉大で美しい教会を後にし、サンタ・マリア・デルマル教会へ。1329-84 年に作られたゴシック建築で、昔から船乗りの人々が出航前に必ずこの教会に寄って、マリア様に航海の無事を祈ったと云う。近くにはコロンブスの銅像もあった。次はカテドラルへ。1298-1448 年、150 年もの年月をかけて作られたロマネスク様式の教会である。そこを出た所で、私はよく下を見ていなかった為か、木が植えられてあったと思われる穴に落ちて左手指をピアノを弾く姿勢とは逆についてしまった。そのうち赤くはれあがり、痛みも少し出てきたのでホテルの隣にあった病院で診て頂くことにした。

サグラダ・ファミリア教会の前で

美佐子さん（左）、筆者、甥の哲二（右）

この時美佐子さんや甥がいてくれたお蔭で本当に助かった。病院でレントゲンをとってもらったが幸い骨は折れていなかったのでホッとした。つけ薬と痛み止めの飲み薬が出された。日本の様な湿布はないらしい。先生に診て頂いている間、甥は間に合わなくなった飛行機を最終便に変えてくれてあった。マリア様は私を守って下さったのだろう。美佐子さんともお別れをし、グラナダ行の飛行機に乗り、夜中に彼地のホテル、M.A.ABEN-HUMEYAというところに着いた。部屋は紺と白の細い柄のカーテン、ベッドカヴァーで統一されており、現代的なバルセローナのホテルとは違い、素朴な感じだった。

１７日（火）曇後晴　日本での旅行会社にアルハンブラ宮殿のバス・ツアーの切符を頼んでおいたので、それに出かける。グラナダの発祥地はアルバイシンだと云われているが、私は以前より行ってみたいと思っていた所なので楽しみだった。タロ川をはさみ、アルハンブラ宮殿が、又、反対側にはアルバイシンがある。 イベリア人、ローマ人、アラブ人達が大昔住んでいた古い街である。1492 年、キリスト教徒の街となるが、その前は 781 年も長い間イスラムが支配していた為、建築、美術等その影響が色濃く残っている。そして周囲の珍しい植物や南方の花と共に、宮殿や池は幻想的な美しさをたたえていた。「メスアルの間」と云い、王が政務をとった部屋、それから「大使の間」と呼ばれ、11m四方、正方形の部屋で王との謁見があったとされる所の床、天井の細かい細工、絵タイルと、すべての装飾は想像を絶する程の

グラナダ：アルハンブラ宮殿の傍らにて

見事さで圧倒された。又、そこには王のハーレムもあったそうだ。アルバイシンは細い急な坂道で余り通る車も見当たらず、タクシーに乗ったまま見てまわった。

１８日（水）晴　朝 7.30 時にホテルを出、10 時グラナダ発のイベリア航空に乗り、11.15 時マドリッド着。グラナダも同様だが、町の中心地まで 15 分という短距離なので助かる。タクシーの料金も決まっているのか、双方とも 30EUR だった。ホテルはパセオ・デルアルテ。モダーンなインテリアの施されたもの。荷物を部屋に置き、すぐにトレド行きのバスに乗るため、指定された別のホテルへ移動する。ものの本によると、トレドは紀元前 190 年頃から歴史に登場し、600 年もの間ローマ帝国に支配され、その後ゲルマン民族が入ってきて、トレド王国を作り、更に西ゴート王国の時代となり、7 世紀にはイスラム教が強い勢力をもつことになる。722 年前、そこへキリスト教徒達の国土再征服（レコンキスタ）があり、それに加えてイスラム、ユダヤ教の各々の秀れた文化、医学、天文学、数学、哲学他が栄え、16 世紀にトレドは統一されたスペイン帝国の都として繁栄したと云う。ハプスブルク王朝とも深い関係があり、王宮に向かうビサグラの新門の上には、トレド市の紋章である双頭の鷲の彫刻もみられた。途中眼下に広がるタホ川の流れる町並みを見たが、威厳があり美しかった。トレドはギリシャのクレタ島出身で、イタリーで学んだエル・グレコのゆかりの地でもある。サン・トメ教会の中にある彼の絵、「オルカス伯の埋葬」が素晴らしかったので、彼の住んでいた家も見たかったが、ツアーに組み込まれておらず残念だった。旧市街、石畳の狭く急な坂道を降り、待っていたバスに乗って１時間位？でマドリッドの町に入った。スペイン広場に着くと、沢山の車や人で一杯だった。至る所に各国の要人が乗っていると思われる車が通り、警察官が出動、中には馬に乗っている人もいた。明日はスペインの王様ファン・カルロス１世が王座を去られ、皇太子のフェリペ 6 世が新国王になられるそうで、今日はその交代の儀式がとり行われるということだった。ファン・カルロス１世は何度か手術を受けられ、健康状態が思わしくないため新国王に代られるが、幾つもの新聞にそのことが大きく報道されていた。又、ホテルのロビーでは、１台のＴＶが遅くまで王家のご家族や儀式の模様を写し出し、他の１台ではブラジル・ワールドカップの様子が放映されていた。

１９日（木）晴　ホテルから徒歩ですぐ近くにある待望のプラド美術館へ。この美術館は 1819 年に創設されたが、古くは 15 世紀より王様だった方々のコレクションから始まったと云われる。幾多の紆余曲折を経て守り続け、後の近代化にも力を注ぎ、今はプラド美術館とソフィア王妃芸術センターの合意のもと、作品の分配収蔵をされているそうだ。それにしても昔の王様や貴族たちは秀れた審美眼とそれに伴う財力があったものだと感心した。当時は宮廷おかかえの画家達又、教会からの依頼を受けて作品を描いた人達も多くいたのだ。各々が真剣勝負をしていたのだろう。

プラド美術館

プラド美術館にはベラスケス、ゴヤ、ムリーリョ、エル・グレコ、スルバラン、等のスペインの大作家の他、イタリー、フランドル、低ドイツ等の画家、ティツィアーノ、ティントレット、ラファエロ、ティエポロ、フラ・アンジェリコ、ボッティチェリー、ヴェロネーゼ、バッサーノ、ブリューゲル、ルーベンス、ボス・ヴァン・ダイク、ラ・トゥール、メムリング、クラナッハ、デューラー他、書ききれない程の秀れた画家やフランスのプッサン等の絵画も見ることが出来た。特にベラスケス、ゴヤ、ムリーリョ、エル・グレコは数も多かったし、ゴヤの晩年の「黒い絵 」には感動を覚えた。彼は 40 歳位から耳が聞こえなくなったそうで、その内面を打ち出すこと、暗黒の時代と云われ、政治的な意味合いも含め、人間の心理描写が鋭く、「食事をする二老人」「魔女の夜宴」「砂に埋もれる犬」「わが子を食らうサトゥルヌス」他、余りにも暗く怖い絵に驚いた。午後はアトーチャ駅から電車に乗り、１時間弱程の所にある王家の夏の離宮だったアランフェスへ。今日、マドリッドでは新国王の戴冠式なので、公共の建物は閉鎖されているかもしれない、とホテルでは云われたが、その様なこともなく、内部を見ることが出来た。庭園は広く道に迷ってしまい、ようやく駅迄戻り、マドリッドへ帰ることが出来た。立派な美術館や王宮のあるエル・エスコリアルにも行きたかったが、時間がなくあきらめた。

２０日（金）晴　朝から歩いてティッセン・ボルミネッサ美術館を見る。ここはハインリッヒとハンス両親子のボルミネッサ男爵が収集した美術館で、13-14 世紀イタリア絵画から現代の絵画に至るまで 800 点もあり、個人のコレクターとして世界第２位とのこと。１Ｆは現代作品、２Ｆは 17 世紀のオランダ、18 世紀のイギリスとフランスの絵画、19 世紀のヨーロッパロマン派、そしてフランス印象派の巨匠達の絵画、３Ｆはイタリアとフランドルのルネサンス時代の作品が見られ、その質と量に驚く。帰りは植物園の中を歩き、午後は国立ソフィア王妃芸術センターへ。ここは主に近代、現代の作品が展示され、１万点ものコレクションがあるということにびっくりする。２Ｆにピカソ、ダリ、ミロなどスペインの重要な作品が並び、ピカソの「ゲルニカ」もニューヨークから戻り、この場に展示されていた。1937 年スペイン北部バスク地方の都市、ゲルニカが、ドイツ軍によって空爆され、その知らせを受けたピカソは急遽「ゲルニカ」を作成、パリの万国博覧会のスペイン館での壁画を予定していたが、それを変更したのだった。当時スペインはフランコ体制に

あり、政治は右派、左派が激しく対立し、ピカソはフランコ政権の反対派で、パリに移住してからも最後まで左派を通したそうだ。「ゲルニカ」は凄惨な内戦の中から生まれた作品なのだ。芸術センターでは又、20 世紀初頭から 1970 年代にかけてのスペイン絵画の流れを分り易く見られる様に配置されているのは流石であった。

国立ソフィア王妃芸術センター前で　　左前方が筆者

〈１０月号掲載の後編に続く〉

（ふかさわ・りょうこ　本会　代表理事）

☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆

【7 月号の訂正】

表紙　右上の小さな文字の２行目

第 53 巻 6 号　通巻 **559** 号　→　　第 53 巻 6 号　通巻 **560** 号

10P.　上から 10 行目

市村座【誤】→　市川宗家（成田屋）【正】

未来の音楽人へ（16）　作曲　藤村記一郎

１．生まれる前のこと　童謡作曲家・山口保治氏との「関係」

私は、１９５２年愛知県豊川市に生まれた。私の両親の探した家がたまたま豊川市出身の童謡作曲家・山口保治氏（「かわいい魚屋さん」「ないしょ話」「ふたあつ」など作曲）の住んでいらした家だった。そういえば、応接室にアップライトピアノの跡がくっきりと残っていた。私の母校の小学校ではずっと「かわいい魚屋さん」を歌い続け、中学校では山口氏作曲の「校歌」が歌われている。

２．小中学生時代　音楽を意識したとき　鼓笛隊・妹のオルガン・吹奏楽部

小さい頃、私は、小学校の学芸会で「劇」に回されるのがイヤでいつも「器楽」グループに入ることを希望していた。そのまま、鼓笛隊に入り、なぜか、いつもシューベルトの「軍隊行進曲」を口ずさんでいた。

６年生になったとき、両親が妹のためにオルガンを買った。習いに行った妹はじきにやめてしまい、オルガンは私の専用の楽器となった。叔母の買ってくれた童謡の楽譜を弾いたり、高校時代はコードネームとその響きに興味を持ち、オルガンで実際にコードネームの通りに音を拾ってその響きが出た時の感動を今も覚えている。その曲は映画音楽の「男と女」だった。メジャーセブンスコードの不思議な魅力はこんな音の構成から！と納得した。

トランペットと（中学３年時：1967 年）

中学生になり吹奏楽部に入った。楽器は唇の厚さから「メロホン」（ホルンが学校にはなく、その代りのメロホンだった）になり、初めて吹奏楽の音楽に触れた。たいてい最初はマーチを練習する。なんと、そうしたら自分でもマーチが作曲したくなり、家ではリコーダーで音を拾いながらマーチのモチーフをたくさん作曲した。１年間メロホンで、マーチの♪ウンパウンパ、というリズムセクションの後打ちばかりをやって、少々飽きてきたころ、コルネットに交代できた。３年間吹奏楽部にいたおかげで、マーチのモチーフだけでなく、クラスの歌とか歌謡曲の作曲などにも興味を持つようになっていた。

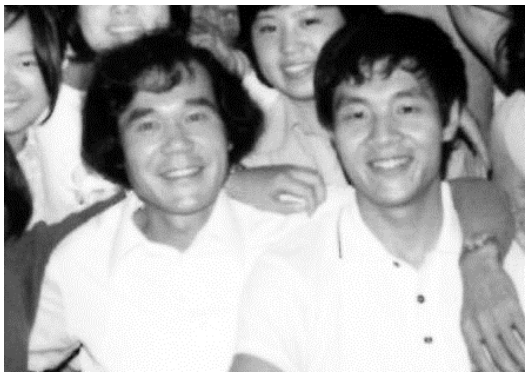
３．高校生時代　中田喜直氏との出会い　音楽をやっていこうと思った時

高校時代はサッカー部に入部。新入生歓迎会でサッカー部の先輩がテーマソングを披露するのを見て、「よし、来年は僕が・・」と思い、それ以後、卒業するまで新入生歓迎会と卒業生を送る会で生徒会から募集されるテーマソングをいつも創っていた。夏になるとコンクールに出場するために男が足らないと合唱部にも誘われ、合唱の楽しさも知った。

高校３年のとき、NHK で当時放映されていた「あなたのメロディ」という番組に出場することになった。というより、出たいと思い友人とともに創った作品「海のゆりかご」を送った。８月に出場した時、当時審査員をされていた中田喜直氏が「当たり前でないいいメロディですね」と褒めて下さった。友人たちには「僕は作曲家になる」と宣言、少々有頂天になっていた。たまたま、翌年３月に行われた「あなたのメロディ・年間最優秀コンテスト」にも選ばれて、ますますその思いは強くなった。ただ、ピアノをやっていなかったので、作曲家をめざすために音楽大学へいく、という気持ちはなかった。結局進学したのは名古屋大学工学部電気科だった。

４．大学生時代　名古屋大学男声合唱団との出会い
音楽と社会、音楽の果たす役割を知った時

大学に入って、最も大きなことは名古屋大学男声合唱団に入ったことだった。「生活に結びついた歌を」「社会に明るい歌声を」が合唱団活動のスローガン。合唱連盟とうたごえ運動の両方を視野に入れてきた先輩たちの活動の上に立ってそれまで出会ったことのなかった社会的テーマの楽曲を歌うことになった。私も当時「ベトナムに平和を」という曲をつくり、合唱団で歌ってもらったが、演奏旅行で高校生に聞いてもらった時の反響に、自分の作曲でも人の心になにかしら与えることができた、という初めての感動を味わった。



学生時代　寺原伸夫氏（左）と

２年生の夏、指揮者になると先輩から「指揮者はピアノくらい弾けないといけない」と言われて、「じゃあ、教えてください」とその先輩について半年ほど練習することができた。後にも先にもピアノを練習したのはその時だけだった。

私たちの上の学年が、モスクワ音楽院に留学した寺原伸夫氏が日本に返って来られたところへ、新作委嘱の依頼をした。「機関車」という合唱組曲ができ、その後、「マンモス狩りは夜明けにはじまる」という作品ができた。このことが縁で、たまたま東京から名古屋の日本福祉大学の音楽の先生

として来られた寺原氏の教職員住宅に２年間も＜間借り＞をさせていただくことになった。２階にはグランドピアノが置いてあり、寺原氏不在の時はそのピアノを自由に弾かせていただいた。

このあたりから、工学部の勉強には興味が持てず、将来は作曲の仕事で、と考え始め、音楽大学を受験し直そうと思った。そのことを高校時代の音楽の恩師に相談にいくと「芸術の道は、そのように人に相談にくるような気持ちでは務まりません。やめなさい。」と言われ、自分が工学部の勉強から逃げていることを鋭く指摘された。そこで、まず大学は卒業しよう、進路は教員をめざそう、と考えた。

その大学卒業の年、ハチャトリアン歓迎大音楽会の話がもちあがり、愛知全体の音楽運動にとって大きなインパクトのある企画となり、さきほどの「マンモス狩りは夜明けに始まる」を日本フィルのオケ、ハチャトリアン指揮でうたう合唱団には８００人もの応募があった。当然のことながら、寺原宅が事務所となり、私が事務局長となった。夢のような音楽会だったが、本番直前にハチャトリアン病気のため来日できず、ということで“幻の音楽会”となってしまった。

５．就職してからの音楽活動のはじまり

卒業後、名古屋市の教員採用試験に合格し、名古屋市立高校の数学教員（大学が工学部だったため、数学・理科・工業の免許が可能だったが、不器用な自分としては、あえて数学だけにした。）となった。

合唱は、日本のうたごえ運動の中で、ハチャトリアンに見出された組曲「日本の夜明け」をはじめとして多くの名曲を残した寺原氏のすすめもあり、「名古屋青年合唱団」に入った。教員仲間で「愛知教職員合唱団」も結成した。また寺原氏が将来保育士をめざす学生に音楽を教えていたこともあり、名古屋市の保育士と「子どもの歌を作る会」を結成、たくさんの創作遊びうたをつくり、楽譜集・レコードも出版した。

藤村記一郎作品コンサートで（1993 年 6 月）

６．数学教員としての音楽活動

また、行く先々の高校で校内の合唱コンクールの運営や生徒の持ってきたポピュラーな楽曲の編曲や、高校野球応援のための校歌のブラスバンド編曲など学校内音楽活動も楽しかった。部活動はたいていブラスバンドだった。授業は数学だったが、楽しい数学を、と数列の授業で「ピタゴラス音階やハーモニー」の話を教室にギターを持ち込んで、実際に弦の長さを測り、弦の長さを1/2にすると振動数は２倍になりこれがオクターブ、弦を2/3にすると５度上の音に、など振動数とハーモニーの響きを実感してもらった。バッハの平均律は１オクターブを１２段階の同じ倍率の振動数にわけたもの、ひとつの半音の音程をｒ倍とすると、ｒ×ｒ×・・・の１２乗で振動数２倍となる、つまりｒは「２の１２乗根」で約１．０６くらい。これは等比数列の授業。

数学ソングもたくさんつくった。「因数分解のうた」「二次方程式の解の判別式のうた」「三角比のうた」「ス・キ・ヨの３つの文字が～階乗のうた」ほか、公式を無理やり覚えるためのうたではなく、数学を楽しんで笑ってもらいたいという発想だった。教室にギターを持っていき歌った。ＣＤまでレコーディング、出版してしまった。

７．劇団うりんことの出会い　劇音楽づくりの楽しさ

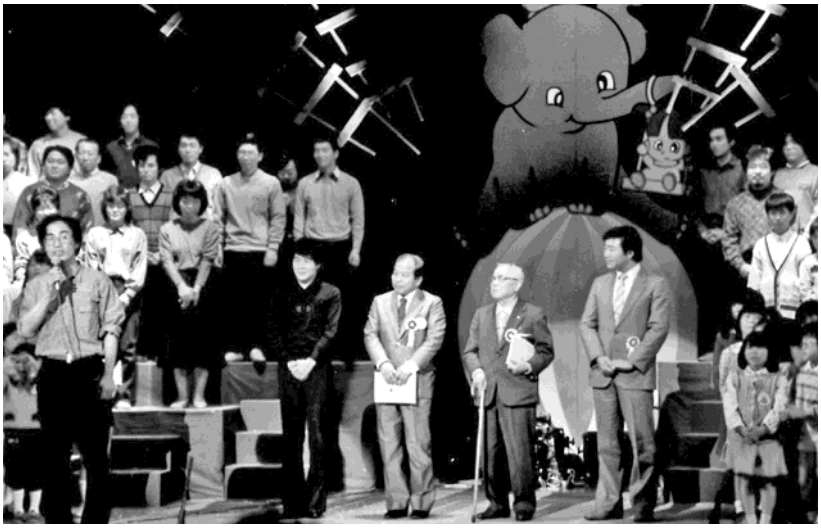
私が就職したころ、「劇団うりんこ」が誕生し、今も日本中を公演し、多くのファンがいる。その「うりんこ」から劇中歌や音楽を依頼されて何作かつくった。作曲だけでなく、劇中で実際に使えるようにアレンジし、録音まですることになり、これはそれまでに体験したことのない大変刺激的な「仕事」だった。あるとき、アキレス腱を切って入院したが、そのときも「入院中はヒマでしょ？」と作曲依頼、病室にキーボードを持ち込んで「おこんじょうるり」を作曲することになった。

８．「ぞうれっしゃがやってきた」との出会い
　世代を超えた合唱と歴史を語り伝える事

就職した当時結成した教職員合唱団がつぶれかけた頃、合唱団再生をめざして、教育をテーマに新しい合唱組曲をつくった。それを歌う子どもたちや市民を募集し、合唱団はよみがえり、名を「愛知子どもの幸せと平和を願う合唱団」と変えた。

そして、今度は合唱団の名前にふさわしい曲をと、テーマを探し、絵本「ぞうれっしゃがやってきた」（小出隆司著　岩崎書店刊）に出会った。名古屋の東山動物園での戦前戦後にかけての実話をもとにしたものだ。感動の実話を日本中に広げたい、そのねらいどおり多くの子どもたちや先生、市民の愛唱歌となり、日本中の学校や地域で毎週のように演奏会が行われた。今年は「ゾウ列車運行６５周年記念」として、木下サーカス名古屋公演のテントの中で、本物のゾウと一緒に全国から集まった５００名の合唱ができた。

多くの学校や地域で音楽会が開かれ、そこで歌った人たちが引き続き歌いたいと「〇〇ぞうれっしゃ合唱団」が全国に数多く誕生した。そうした「大人と子どもで一緒にうたう恒常的な合唱団」のために、その後「子どもの人権宣言」「とべないホタル」「カネト」「バックトゥザ・フーちゃん」など数多くの合唱劇、ミュージカル形式の曲をつくり初演していった。



ぞうれっしゃがやってきた初演舞台　故北王園長、原作者作詞者とともに　　1986 年 3 月 30 日

家族で一緒に取り組むと「大人も子どももそれぞれふだん見えない、いいところが見えて互いに尊敬の念を抱けるようになること」「平和やいのちの尊さを語り伝えようとするとき、あらためて平和教育と構えずに、毎日家で楽しく練習をし、そのことが本番までのある一定期間、常に家族中の話題とできること」ということが何年間も続けているうちにわかってきた。

寺原氏がソ連（現ロシア）で学んできて私たちに言われたことに「子どもたちにこそ最高の芸術を」という言葉がある。子どもたちは、本気で取り組めるものに出会うとどんどん成長していく。ほめられれば自分の存在に自信を持ち、舞台で拍手をもらえばやりきった自信と感動が病み付きになっていく。そんな出会いや経験をたくさんさせていただいて、私自身もいろんなことを学ばせていただいた。

９．未来の音楽人へ

教員としては、やや早めに５３歳で退職し、それ以後は音楽を仕事とした。高校生時代に中田喜直氏の言葉で「将来は作曲家に！」と思い現在それを肩書きとしている。

人が音楽を好きになり、志す理由は色々だと思う。私は多くの人や音楽との出会いからその気持ちが強まった。今の夢は、２０１５年愛知で開催する「日本のうたごえ祭典」で５０００人の「ぞうれっしゃ」大合唱を成功させること、沖縄・読谷村を舞台としたオペラを創作初演することだ。夢は難しいことほどいいのではないか、と考えている。

（ふじむら　きいちろう　　本会　作曲会員）

コンサー・トリポート　COMPOSITIONS　２０１４

６月２７日（金）ヤマハエレクトーンシテイ渋谷メインスタジオでCOMPOSITIONS 2014-エレクトーンのための作品コンサート（日本音楽舞踊会議主催、協賛ヤマハエレクトーンシテイ）が開催された。

ところで，エレクトーンは電子オルガンの一種だがその歴史はまだ日が浅く５０数年でしかない。特色はオーケストラの各楽器の音色が内蔵されていて独奏でもオーケストラ的な多彩なサウンドを実現出来る所にある。近年，シンセサイザーを使用したリアルな各楽器の音源を持つ打ち込み音楽が技術的にも向上して盛んとなり，そのせいか、エレクトーンの音色に対する物足りなさを耳にする事が時にある。しかし最も異なる所はどれだけ生音に近い音源であってもスピーカーを通して流れる無人の音と演奏家の情熱を直に感じ取れ、パフォーマンスを通して音と視覚との両面から聴き手に迫るエレクトーンとでは自らその説得性や緊張感の差異は明らかとなるであろう。今回のこの“COMPOSITIONS”は１９９０年に始まり現在で14回目。既に発表された作品は今回のものを入れると８０曲にもなると云う。歴史の浅い楽器のため曲がまだまだ少なく必然的に新曲が求められる事実がある。次に，演奏会のプログラムを挙げておく。

①白岩 優拓　Lunaticro i~電子オルガンのための～（初演）演奏　ELS-０２X；作曲家本人
②BIRTH1-1(ZERO)～マリンバと電子オルガンのための～（改訂初演）
　　演奏　Marimba；仲田 清志　ELS-02X；竹蓋　彩花
③福地　奈津子　電子オルガンのための小品「音の画集」より
　1.Foreword（1996）／ Ⅳ.dwarf～魔力を持つこびとたち～（1998）
　Ⅴ.混沌とした…Confused （1998）／Ⅶ.紫色のフォトグラフ（初演）
　　演奏　ELS-02X；作曲者本人
③安彦　善博　水の肖像（２００６） 演奏　ELX-02X；山木　亜美
　　休憩
④三宅　康弘　バベルの塔－電子オルガンのための（２００４）
　　演奏　ELS-02X；柿崎　俊也　音響；平山　喜子
⑤菊地　雅春　秋・TEMARI-UTA（改訂初演・招待作品）
　　演奏　ELS-02X　安藤　江利
⑥中嶋　恒雄　ヴェネツイア幻想（改訂初演）　演奏　ELS-01X；大畑　莉紗

最初の白岩優拓のLunaticro iはlunatic（狂気じみた）とmicro-tone（微分音）の造語だと云う。ストリングスの音色が中心の曲で作者によると空想的且つ非現実的な世界を微分音によって表現したとあるが、曲の空想的側面は是としても非現実的な深層心理を感じさせるには幾分凄みがかけているやに受け取れた。むしろ，心理描写的ではあるが私には世紀末的なロマン派音楽との近親性が感じ取れたのだが。又，作者本人の演奏は心のこもった好演であったし、曲としても充分纏まったものになっていた事をここに記しておく。２曲目、Birth1-1はマリンバと電子オルガンのマリンバの音色、ピッチを対峙させその相乗効果が狙いであったようだが，そこ

に関心が集中したあまりアコースティックマリンバではこの楽器の特色である運動性や，奏法の面白さは発揮されず，又，エレクトーンの方のマリンバは奏者の左手が遊んでいる事が多くあり､アンサンブルとしての充実性の弱さが目立った｡発想，着眼点の面白さだけでなく奏者が生き生きと演奏出来る面も忘れてはなるまい。それなくしては単なる実験で終わってしまおう。

次の福地奈津子の曲は彼女の「音の画集から」Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅶ（演奏順に並べてある)を選び作曲者本人による自演となる｡Ⅶの４曲目だけが新しく書かれている。４曲全体を聴いた印象は力まず，普段着で書いている曲の中に、響きの良さや，自然で無理の無い和声に支えられた音楽的センスの点在が見て取れた。
小曲ではあるが音楽語として意味の分かる作品群だったと思う。ただ、二つ目のdwarf では移ろい易い面は是としてももう少し素材の発展があっても良かったのではと考えられるがどうか？又，三つ目の「混沌とした」でもある意味，破天荒に暴れる箇所があれば曲の説得力はもっと高まったのではないかと考えるがどうか？演奏は落ち着いた良い演奏だった事を記しておく。

次の第一部の終わりの曲が安彦善博の水の肖像。演奏は山本亜美の独奏。「水滴」から始まり「波紋」「流れ」「空へ」と継時的に広がって行く水についての心象風景的音画。ここではエレクトーンならではの具象音を含む様々な音色が駆使されている。しかし、これらは作者によると奏者のアイデアによる所が多だそうである。曲は、或る意味，水の生態の抽象的表現としては成功していると言えようが，前半の持続にある緊張が，曲の後半には充分でなく、弛みが生じており，それが構成の弱さに繋がった様に私には思えた。もう一押しの立体的な構成面での工夫があれば曲の存在感はずっと強いものになったのではないだろうか。

休憩後の一曲目が三宅康弘の「バベルの塔」－電子オルガンのための
作者によるとバベルの塔のエピソードが調性からの崩壊の歴史を彷彿とさせ、それがこの曲にコラージュや生楽器音のみならず非現実音をも使う要因になっていると云う。しかし，プログラム・ノートの書き方もあろうが、この壮大なテーマを実現するには作者自身の現代の音楽についてのしっかりとしたヴィジョンや主張が必要なのでは無かったか？だが，私にはそれは聴こえて来ず，前述の事柄が刹那的に伝わってくるのみで、本質的な主張は伝わらずじまいのように感じられた。演奏者が舞台外から登場してくる等、アイデイアとして面白い所や，又，音楽として楽しめる部分も多々あったし，曲としてのまとまりも整ってはいた。だが，現代音楽シーンの混沌の中で現実と未来をどう見るかと云う姿勢を伝えるには至らず、作者のアイデイアを楽しむ姿勢のみが、全面に出てしまったのは頗る残念でならない。

後半，２番目は菊地雅春の“秋・TEMARIUTA”。演奏は安藤　江利。菊池はエレクトーン初期の時代からこの楽器のための作品をずっと書いて来ており、彼の書いたエレクトーン曲は最も良く演奏され，奏者にも好まれる作曲家と云える。今回の作品は１９８８年に西ドイツに演奏旅行に出掛ける森下絹の依嘱により初演されたものを改訂した，とプログラム・ノートにはあった。曲は日本的な序の後、陰旋法に基づいたテーマが登場，その後オスティナートが現れるが、主要な全ての要素が緊

密な関係を持っている事が耳で確かめられ,それらが充分なクライマックスを持ち,有機的に構成された主張のはっきりした音楽として我々に伝えられる優れた曲になっていたと私には思えた。又，解り易い民族調の中にも多調の響きや無調的な現代的響きも取り入れられており、それらが絡まって安易な民族調に流れる事は無かった。更に，演奏家の腕を発揮するヴィルトゥオーソ性も曲趣を盛り上げていたと云って良かろう。色々な観点からエレクトーン曲としてのこの曲の完成度の高さは特筆すべきだろう。演奏した安藤もダイナミクス，リズム的表現共、自然で躍動的,好演だった事をここに記しておく。

最後の曲が中嶋恒雄による“ヴェネツイア幻想”。

この曲は、作曲者がかつてサンマルコ広場に始めて行った時、既にカーニバルは終わっており，ヴェネツイアの困難な建国の歴史とその時代、出会えなかったカーニバルを想像して書かれたものと筆者は推測する。曲は４部からなっており，まず最初は現代音楽的な音響マス手法に依る音の描写が現れ，これが効果的なインパクトを与えた。続いて雅楽を思い起こさせる邦楽的な第２部が続く。これは，ヴェネツイアに於ける本人の日本への郷愁か？この部分の後，第一部にあった音響マスの部分が回帰してくる。ここでは前の空間のある雅楽的部分とが対比され、効果を高めていた。第４部はフェスティバァルを連想させる部分で速い変拍子の打楽器のリズムの導入によりテーマに続く。テーマはペンタトニックのうちの４音とそれに残りの３音を加えたイオニア旋法からなっており，フェスティバァルに相応しいリズミックで明るく、躍動的で印象的。但し，これはラヴェルのクープランの墓やドビュッシーの連弾曲を連想させるテーマなのだが西洋でのフェステイバル幻想と云う事で，その事は許容されよう。又，東洋と西洋の混合と云う点から見ても（ドビュッシー等の東洋からの影響も鑑みて）。つまり，旅行者である作曲家が出会えなかったフェスティバァル幻想と云う仕掛けと見た。リズミックに前進して行くこの調性的な曲は前の二つとの明確な対比を持つ。歯切れ良く，途中の移行では調性逸脱の緊張等も含みながら大団円に向かう。４部に分かれたこの曲では作者の意図は充分実現し伝えられており曲として成功していたと私は思う。但し難点を云えば（これは曲の本質に関わる部分ではないが），当日のＰ・Ａの音響が大き過ぎたため，特に，雅楽の部分での東洋的な空間表現が生かされ無かったのは残念である。又，一部、３部の音響マス手法の所ではそれ自体は良しとしてもリゲティに見られる様な実際のオーケストラの生音での微妙な演奏効果を知っている筆者には仕方ない事だが、ミニチュアサイズに聴こえてしまった事がある。加えて、４部の調性的部分から逸脱する移行部分は、私の好みではもう少し長い逸脱の持続があった方が更なる緊張の高まりを産み出せたと考えるのだが。演奏の大畑は勢いがあり，リズム感の良さも相まって好演であった事を記しておこう。

終わりになるが今回の演奏会は全体としてバラエティーに富み，且つ、多くの意欲的作品によって，聴き手を飽きさせない優れた演奏会だった事をここに記しておこう。今後の継続も期待される所である。

２０１４年　７月２３日　　北條　直彦　記

歌の道・我が音楽人生 (6)

～プロ室内合唱団「日唱」と共に半世紀～

日本合唱協会代表 **久住　祐実男**

第１部＜音楽家を志す迄＞Ⅶ

芸大別科で１年間受験の準備ができたおかげで、3 月の芸大受験には間に合うと思ったが、矢張りピアノに不安があった。まだ正式には先生について習ったことがなかったからだ。

ある時別科の先生の藤村晃一先生のリサイタルがあった。その時のピアノ伴奏の先生に友人を介して、ピアノの指導をお願いした。先生は快く受け入れて下さった。その先生はピアニストの久本成夫先生だった。東京音楽学校（現芸大）を卒業されて当時フリーの先生でご自宅で生徒を教えていらした。

幸い、ご自宅は大岡山で、私の家から大井町線で 10 分で行けた。毎週月曜日にレッスンに通うことになった。先生は後に国立音楽大学の名誉教授になられたが、その前にソプラノの名花奥田智恵子先生と結婚された。その話はさておき、私は先生のレッスンを受けるようになったが、あまりにも私のピアノが未熟すぎるとおっしゃって、先ず手の形から徹底して直された。フォームがきちんとすれば必ず上手に弾けるようになるので、曲を勉強するよりハノンで指の形をしっかり作ろうということになった。曲はぽつぽつ自分でさらうことになった。

さてここで久本先生に教わったことはピアノのレッスンだけではなかった。午前中から夕方まで、囲碁を教わり、また輪ゴム飛ばしで標的を落としたり、そうかと思うと電車の模型を走らせて実際にはこの速度は時速 80 キロ位だと、狭い視野を通過する秒数から算出して見せたり、私も一緒になって夢中になって遊んだ。何のために先生の所に来ているのか判らなくなるほどだった。毎週月曜日が楽しみだった。

こうしたレッスンだったがそれでも不思議と受験には何とか間に合ったのだろう、その年の受験には合格できた。他の別科の仲間たちもみな揃って合格だった。

合格の発表を見に行った時、たまたま私のすぐ横で合格の発表を見ていたのが、その後私との永い付き合いとなった作曲科に合格した萩原英彦だった。二人で握手をして喜び合った。

入学してみると、同級生には驚くべき音楽の才能の持ち主が沢山いて、楽しかった。友達も沢山できた。私は何故か作曲家の友達が多かった。ピアノ科の連中とも仲良くしていた。勿論声楽科にも友達はいたが限定されていた。私は美校にもよく出かけ食事をしたりテニスの仲間に入れてもらったりして、美校の建築科や日本画科の学生たちとも交流を深めた。

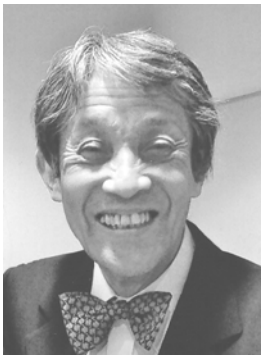
私の声楽の先生はドイツの宮廷歌手の称号を持つヴーハ・ベーニッヒ先生だった。凄いバスでオクターブ下のＡ・Ｇまで見事な響きを持った音を出して見せた。時間に厳しい先生で１分でも遅れると懐中時計を取りだし、「どうして遅れたのですか」と詰問された。とは言え８時からのレッスンはきついものがあった。そこで私は一計を案じ、前の日から先生の気に入りそうな、美人のピアニストに頼んで、早朝のレッスンに伴奏者としてついてきてもらった。すると多少時間に遅れても、先生は相好を崩し、彼女を座らせるとその横に座って機嫌よくレッスンをして下さった。ハイドンのオラトリオやモーツァルトのオペラのアリア、ドイツ歌曲等を歌わせられた。発声法は深い声を要求され、私の細い声には無理な様な気がしていた。しかし音楽的には沢山得るものがあって充実していた。

しかしヴーハ先生は一年限りで母国ドイツに帰られることになった。とても残念だった。

代わって芸大にいらしたのが、リアフォン・ヘッサート先生だった。私にとって運命の出会いだった。ヘッサート先生は、ヴーハ先生の沢山の生徒の中からテストをして、私の学年から私だけ一人選んで下さった。爾来、ヘッサート先生が 80 歳の高齢でドイツに帰国されるまでの 40 年間師事し、これ以上はない音楽を教えて頂いた。私の今日までの音楽・芸術・人間性の殆どすべての糧となった。今でも幸せに思っている。私は受験期は別として一生日本人の先生には教わったことがなく、いつも世界の窓を見ながら勉強できたことを誇りに思っているし、それが私の音楽人生の支えとなっている。

ヘッサート先生の口を良く開けて素直な声を出させ、下から高音域までむらのない声を作り、言葉がはっきりと聞こえ遠くまで届く声を目指した。声を作ろうという意識は遠ざけた。

先生ご自身もよく勉強されるし、日本での内外の音楽家の演奏会には足しげく通われた。ヨーロッパにも度々帰られ、あちらの音楽事情を見聞し、早くからフィッシャー・ディースカウの才能を見つけ、私にも「素晴らしいの人出ました」と教えて下さった。それからと云うもの、私はフィッシャー・ディースカウのとりこになって、かれの来日演奏会 31 回のうち 30 回も聴きに行って、いろいろ盗むことが出来た。（つづく）



久住祐実男（くすみ・ゆみお）プロフィール
東京藝術大学卒業。在学中は声楽をリア・フォン・ヘッサートに師事。指揮法を渡辺暁雄と山田一雄に、和声法を下総皖一と石桁真礼生に師事。卒業後は指揮と和声法を小船幸次郎に師事。1963 年、仲間 20 人で、究極のアンサンブルを目指してプロ室内合唱団「日本合唱協会（日唱）」を創立した。1973 年には音楽教室「日唱ミュージックアカデミー」を設立し、クラシック音楽の普及に努める。現在日本合唱協会代表及び指揮者。日唱ミュージックアカデミー校長。日本演奏連盟会員。

連載　**音・雑記－ひなの里通信**（70）　狭間 壮

おすすめかき氷
― トッピングはセシウム？ ―

寒いサムイと言ってたのに、暑いアツイの毎日だ。少し暦のめぐりが早すぎはしないか。と、ぐちってもはじまらない。

外へ出たついでに、今日はかき氷を食べよう、と決めた。久しぶりだ。心地よいカリカリと氷を削る音が聞こえる。

待つ間に浮かぶのは、いつも山口誓子の句。「匙なめて　童たのしも　夏氷」。スプーンに残るシロップの甘み名残り惜しく、自らの幼き日に重なる景色なのだ。

さて、氷イチゴ。今はやりのトッピング。バニラアイスなどもりつけて、と注文。レトロなガラス器の底に赤いシロップ。その上に雪のように削られた氷の山が、ふわりと盛りあがり。山のてっぺんにバニラの帽子。

まずは、そろそろサクサク雪山を崩して。「シャベルでホイ！」と口にほうりこむ。鼻から頭に刺激がつき抜け、あゝ夏だ！　このごろでは、夏のスイーツだのトッピングなど、そのもの言いは野趣にかける。しょせんはかき氷だ。気取ったところでしかたない。

この２月、松本は観測史上初の大雪だった。たえまなく降りつもる雪をながめていて、ひらめいた。かき氷で食べよう。そんなこと・・・、と渋る家人をせきたて、フラワースタンドの植木鉢をどけ、ガラスの器を置いてもらう。粉のような雪が、みるみる器にちいさい山をつくる。

イチゴシロップの用意は無いが、ハチミツなら間に合う。水で少しうすめてかける。あらら口の中でさらっと溶ける。そのデリケートな舌ざわり、機械ではとうてい及ばない。調子にのって、ブランデーをたらしてみる。なんとこのチョー旨！　思い出す、子どものころの「雪やこんこ」。喜々として空あおぎ、口の中に入る雪を楽しんだこともあったよな・・・。庭の雪かきに専念している家人に、声をかける。　おかわり？　お・こ・と・わ・り！　だと。

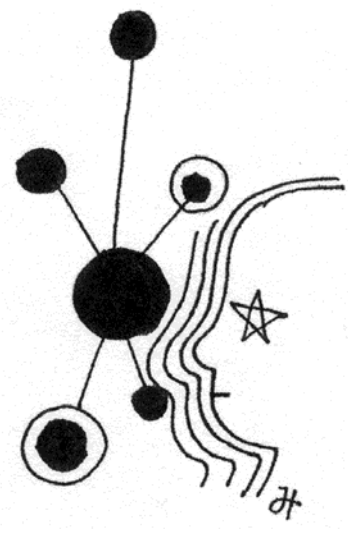
「雪は天から送られた手紙」だぞ。このロマン解さぬとは、なんと無粋な・・・、ブランデーをさらに足して飲みながら、アッ！と気がつく。

中谷宇吉郎博士の先の言葉は、ロマンでもなんでもない。「天から送られた手紙」とは、つまり大気中のチリアクタの情報がつまった、そのレポートということじゃないか。だとすれば、大気中のホコリに、放射性セシウムをトッピングし、吾が胃の腑に収めてしまったということになる。

今さらながらであるが、少々後悔している。というのは、福島の原発事故のあと、放射性セシウムの量測定値が、新聞に毎日掲載されるのだ。人体に影響のない数値というものの、気になる記事。

それで松本、大雪の前後を見る。雪の前日 0.11（マイクロシーベルト／時）が、雪の朝は 0.031 になっている。単純に引き算した量が吾が体内に、とはならないが、いやはや、雪は食べてはいけないのだった。

この放射線量というもの、事故中心点からの距離に反比例するものではない。現に約 200 km地点の東京・新宿と、約 300 km地点の松本、松本の方が数値が高い。さらにあげれば、約 100 km地点の仙台の方が、松本より低いのだ。実に不可思議。いずれの数値も人体に影響はないのだが。



であっても、長野県では、出荷する野菜や牛などを毎日検査。その結果が発表される。それは山菜にまで及ぶ。地域によっては、不合格！もある。山菜の季節は、一喜一憂なのだ。幸い松本地域は心配なしである。

原発から 10 km圏内の浪江町から避難して、松本で暮していたご夫婦から電話が入った。「福島に帰ってきました」。

松本の私のコンサートで、たまたま楽屋を訪ねてこられたことをご縁に、親しくなったご夫婦だ。

浪江町は、まだ帰れる状態ではないが、同じ福島県内のいわき市に家を見つけたという。松本に不満があったのではない。それでもできるだけ故郷に近いところに、ということのようだ。いつかは浪江に帰りたい。少しホッとしたような明るい電話の声であった。早くもどれるといいですね、とせいぜいの言葉をかけて、私は受話器を置いた。

「金目でしょ」の環境大臣の発言がひんしゅくを買っている。除染土の一時保管地域の住民たちへの、配慮に欠けた発言。ご夫婦からの電話があったその夜の、ラジオのニュースだ。

金銭ではない。故郷への断ちがたい思いへの想像力に欠けた大臣のコメントには、心が傷む。

本日の新聞（信毎 2014・7・11）の空間放射線量発表を見る。浪江町（7 月 3 日）はどうだろう。5.5（マイクロシーベルト／時）で居住不可。

浪江って、とってもいいところだったんですよ・・・。ふるさと浪江を語るときのご夫婦はうれしそうであった。一日も早く除染がすすみ、「居住可」のサインが出ることを、私も心から願っている。

かき氷から、話はあらぬ方に行ってしまった。それにしてもこの夏、集団的自衛権閣議決定など性急にことを進める政治のあり方が気になって、暑いアツイなど言ってられないのかもしれない。

が、しかし暑い。暑中お見舞い申し上げます。

【筆者紹介】狭間 壮（はざま　たけし）：中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中ＮＨＫ「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。

【挿絵】武田 光弘（たけだ　みつひろ）

名曲喫茶の片隅から

宮本 英世

〔第 51 回〕

ストラデルラの暗殺

作曲家も私たちと同じ血のかよった人間である。という前提からいうと、人間の最後である“死”がどんな形で来ても、格別驚くことはないかもしれない。しかしハンサムで女性にもてもて、恋愛事件が原因で殺されてしまった作曲家がいる――と聞けば、えっ！と驚き、それは誰？と興味をもつ人がいるのではなかろうか。あれこれある死に方の中でもちょっと珍しい、「恋愛事件が原因で殺された作曲家」というのを、ご紹介してみよう。

アレッサンドロ・ストラデルラ

その作曲家とは、バロック時代（1600～1750）のイタリアの人、アレッサンドロ・ストラデルラ（1644～82）である。といっても、大抵の人には馴染みがうすいだろう。レコードなどでわずかに親しまれている曲に、「神よ、憐れみ給え」（名テナー、ホセ・カレーラスが歌っている）があるが、どちらかといえばマドリガルやモテットなどの声楽曲で知られている人。詳しい生涯については不明な点が多いが、概略をご紹介するとこんな風になる。

生まれはナポリともローマともいわれて、よくわからない。ローマで作曲家としてスタートした後、ヴェネチアへ行き、そこを中心に活躍したらしい。美しく流麗な旋律をもつアリアを中心にしたオペラ（7 作）は、A.スカルラッティとともに 18 世紀ナポリ派オペラの先駆的役割を果たし、オラトリオ（6 曲。特に「洗礼者ヨハネ」が有名）では劇的表現が何よりも顕著。そしてシンフォニアやソナタなどの器楽曲では、コンチェルト・グロッソ（合奏協奏曲）の推進者コレッリにも影響を与えるなど、音楽史の上ではやはり忘れてならない作曲家の一人といって間違いない。

ヴァイオリニスト、歌手としても活躍したと伝えられる彼は、ローマにいた頃、スウェーデンから来ていた女王、コロンナ枢機卿から可愛がられたほか、ヴェネチアへ移ってからも作曲・演奏の合間に音楽を教えた女性たちに、大変にモテたという。いくつかの恋愛事件も起したというから、かなりハンサムだったらしいことがわかる。

さて、このヴェネチアでの教え子たちの中に、オルテンシアという若く美しい女性歌手がいた。彼女には、以前から愛を寄せて面倒を見ていたコンタリーニ

という若い貴族がいて、音楽を勉強したいという彼女にストラデルラを紹介したのも彼であった。ところが、教え教えられているうちに、オルテンシアとストラデルラはいつの間にか愛し合うようになってしまった。周囲もやがては気づくであろうから、面倒が起るのは明らかである。

とうとう決心した2人は、しがらみの多いヴェネチアを離れて別の土地へ行くことにして、ある夜、こっそりとゴンドラに乗り込むと、そのまゝローマへと駆け落ちをしてしまった。

怒ったのは、コンタリーニである。せっかく面倒を見て教師まで世話してやったのに、裏切って駆落ちするとは！断然許せない。見つけ出して、殺してやる！と可愛さあまって、憎さ百倍。早速に2人の刺客を雇うと、ローマへ向けて後を追わせた。刺客らがローマに着くと、その時ストラデルラは聖ジョヴァンニ・ラテラノ教会でオルガンを弾いているところであった。いきなり殺すのも可哀そうと終るまで待ってやろうということになったが、聴いているうちに、彼らに異変が起きた。神々しいまでの荘厳な響きに感動してしまった結果、自分たちがやろうとしていることが恥ずかしくなり、ストラデルラたちを逃がそうという気になったのである。真相を打ち明けると、「すぐ逃げた方がよい」とアドバイス。こうして恋人たちは、その日の夜にトゥーリンというところを目ざして高飛びを敢行した。

一方、刺客たちから「すでにトゥーリンへ逃げられていた」と報告を受けたコンタリーニ。今度は3人の新しい刺客をトゥーリンへ。恋人たちはその間に名門サヴォイ公爵夫人の計らいで、専属音楽家と修道院内部へ。これで一件落着かと思われたが、ある夕方、ストラデルラが襲われた。傷ついたが命は助かり、刺客たちが引き上げてまもなく回復した彼はオルテンシアとようやく結婚。5年ほど平和な生活を送って、作曲も順調に進んでいた。

そのうちに、過去を忘れようとしてか、2人はジェノヴァに移った。ところが、これが命とりになった。諦めたと思っていたコンタリーニが、まだ執念深く狙っていて、新たに雇った刺客がそこで2人を見つけてしまったのである。ある夜更け、彼らの部屋に押し入った刺客は、ナイフを振りかざして襲いかかると夫婦の心臓を次々と刺した。今度は助からなかった。ハンサムで女性たちにモテたといわれる作曲家は、妻を道連れに38才の生涯を閉じたのだった。

【宮本英世氏プロフィール】1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア（洋楽部）、リーダーズ・ダイジェスト（音楽出版部）、トリオ（現ケンウッド）系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」（東京・池袋）の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」（音楽之友社）、「クイズで愉しむクラシック音楽」（講談社）、「喜怒哀楽のクラシック」（集英社）など多数。

【連載】

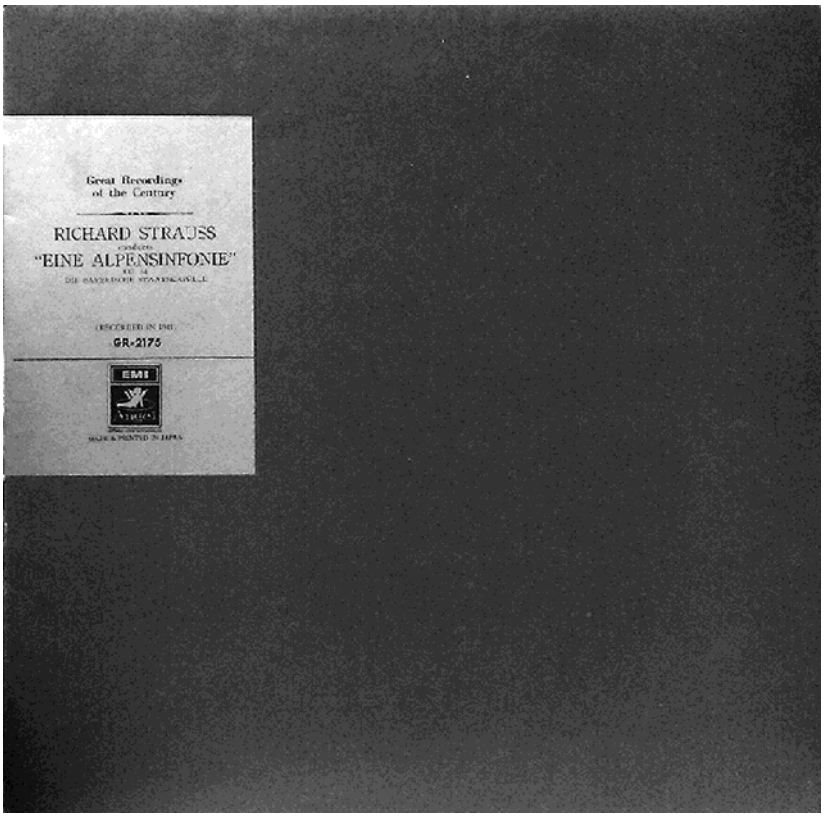
音盤奇譚

板倉 重雄

第56回

リヒャルト・シュトラウス生誕150年

ドイツ・ロマン派の掉尾を飾った作曲家、リヒャルト・シュトラウス（1864～1949）が今年生誕150年を迎えた。彼の作曲年代は大きく4つの時期に分けて考えることができる。第1期は、当代一流のホルン奏者だった父フランツに保守的な音楽教育を施され、その影響で古典派的な絶対音楽を書いた時代（1890年頃まで）。第2期は、指揮活動も行う中で、リストやワーグナーの影響を受け、標題的な交響詩の名曲を相次いで発表した時代（1905年頃まで）。第3期は、楽劇《サロメ》での大成功以降、オペラの作曲に集中した時代（1941年まで）。そして第4期は、オペラの創作に終止符を打ち、「手首の運動」と称して作品番号を付けずに、幸福感にあふれる作品を生みだした晩年期である（1942～49年）。



もちろん例外もあって、アルプスの雄大な自然を描いたアルプス交響曲は、第3期オペラの時代の作品である。この曲にはシュトラウス自身が指揮した録音が残っていて、戦前ウィーンに留学した渡辺護氏の日本盤LP解説にはその辺りの事情が同時代人の目で説明してあり、大変興味深い。それによると、シュトラウスが12年ぶりに標題音楽的大曲を発表したので「世間はおどろいた」という。そして作曲動機として「彼の山荘で日夜親しんでいるアルプスの雄大な自然への讃歌を書きたかった」こと、彼の数々のオペラを初演してきたドレスデン宮廷管弦楽団の「技量を最高度に発揮させる音楽を書きたい」と意図したことを挙げている。

近年、著しく再評価されているヴァイオリン・ソナタは第1期の作品である。しかし、この曲の旋律は実に甘美で装飾的で、同時代のアール・ヌーヴォーの美術品を思い起こす。第2楽章を「インプロヴィゼーション」と名付けたのも、19世紀末の名手達の奔放自在な演奏の反映ではないか。改めて作品と作曲家自身の「体験」の強い結びつき、時代様式の無意識の影響に思いを馳せたのだった。

●R.シュトラウス：アルプス交響曲　**【写真　前ページ】**

作曲者指揮　バイエルン国立歌劇場管弦楽団

［東芝EMI　GR2175］（LP廃盤）

1941年録音。第2次世界大戦中のSP録音で、SPレコードとしてはドイツでしか発売されなかった。これは1968年にLPレコード化された復刻盤である。CDは現在出ていない。

●R.シュトラウス：ヴァイオリン・ソナタ　**【写真　右】**

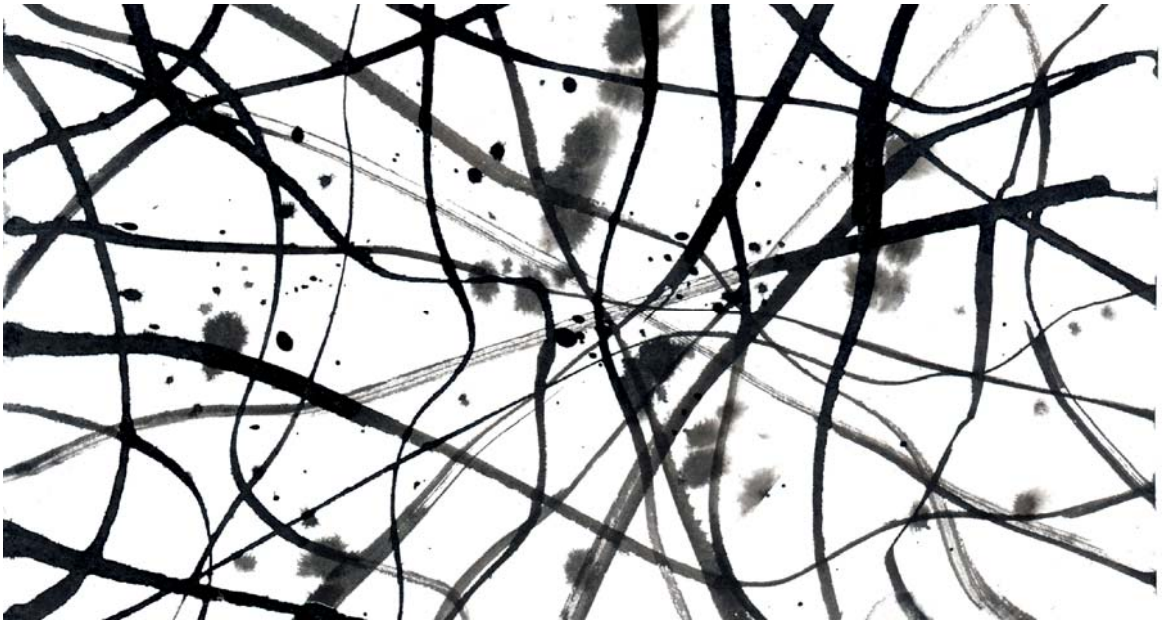
ジネット・ヌヴー（ヴァイオリン）

グスタフ・ベック（ピアノ）

［オーパス蔵　OPK2109］（CD）

1939年録音。第2次世界大戦直前の録音。この年はシュトラウスの生誕75年だったので、その記念録音と思われる。フランスの女性ヴァイオリニスト、ヌヴー（1919～49）は1935年にヴィエニャフスキ国際コンクールに優勝し、一躍その名を世界に轟かせ、戦前はドイツで高い人気を誇った。戦後は旺盛な演奏旅行を行ったが、5度目の訪米の途上、飛行機事故のため僅か30歳で亡くなった。

【板倉重雄氏プロフィール】1965年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994年HMVジャパン株式会社に入社。1996年8月発売のCD「イダ・ヘンデルの芸術」（コロムビア）のライナーノーツで執筆活動を開始。2009年9月、初の単行本「カラヤンとLPレコード」（アルファベータ）を上梓。



人・アート・思考塾(5)

作曲　小西徹郎

「人と社会と芸術と。その２」

「芸術的価値と経済的価値は同等でなければならない」これは武満徹さんの言葉である。よく、商業音楽を生業としている人と芸術音楽をしている人との間の意識の違いを私は常日頃から感じている。たくましく音楽業界を生きていく者はどんどん商業音楽の分野に進出しているし、純粋に作品の芸術性を高めるのみに人生を集中させる者もいる。そして「生き方のシステム」が出来上がってしまっていて、純粋に芸術を求める人たちは「音楽で食べていく」ことを望んでは「いけない」という暗示、また商業音楽に進む者たちはその真逆を歩む。そういう「生き方のシステム」になってしまっている。これは音楽に限らず美術の世界においても同様のことを感じてしまう。商業ベースのものはもっと芸術に寄り添うべきだし、芸術を求める人や作品はもっと「売る」ということにこだわるべきだと感じている。

８０年代後半に私は池袋ART VIVANTを中心とするセゾン文化に触れた最後の世代である。懐かしむわけではないが、あの頃は「芸術をやって食ってやる！」という夢があった。そういう夢をみさせてくれた。もちろん、後々にそれは本当に大変なことであると感じるようになったのは確かだ。だが、自分自身の表現や作品と向き合うことで、自分自身はどこに行けば良いのか？が見えてくる。そこで自分自身に足りないものや、逆に、進んでいくための武器を見つけ、常に頭をフル回転させて提案し、企てて機会を得ていく。そうして繋いでいくしかないのだ。ならば売れるものを作ればいい、路線を変えればいい、となるだろうがこれこそ至難の業である。例えば今までジャズドラムを叩いてきたドラマーがロックのドラムを叩けるわけがない。たかがロック、かもしれないがその「たかがロック」においても奥は深い。

そのことが理解できるであろうか？自分自身の生き方を変えてまで生きていくことは非常に困難で無理が生じて、その生じた無理が第三者、お客様に伝わってしまう、その時点で魅力は失われてしまい、もう終わりである。
私は上記の通り常に提案をしながら活路を見出している。そのことが商業ベースではないもので生計をたてていることは生きていく自信につながっている。だから「芸術は売ってはいけない」そういう意固地で狭い考えの人がものすごく多いことは本当に勿体無いことと思うのだ。果たして本当に音楽大学に芸術大学に進んで未来は開けるのだろうか？そういう疑問を感じずにはいられない。

確かに今の世の中を考えると、芸術は売れるものとは言い難い。だが、売れるものを作る、ということではなく、売れない、だからどうやって売っていくのか？作品が必要とされる場所はどこなのか？どこに必要としてもらえるのか？そのことを常に模索し続けるべきである。また、コンサートを開催する際、集客するために、空席を作らないためにチケットを無料でバラまいてしまう。これで本当に継続していけるのだろうか？例えばコンサートの宣伝についても広告収入が入るようにしていくことも可能だろうし、また他分野では絵画個展をするときには自腹ではなく、個人的でも良いので賛助してくださる方、もしくは企業、などから出資金を集める。また、個展の際には原画だけでなく画集なども売っていく。そして普段から個人レベルで良いので出資者や賛助者には会報のような形でしっかりコミュニケーションをとる。たまには食事会なども開いていく。そこでも収益を考えていく。せめて赤字にしない。と、様々なことが思い浮かぶ。

あなたは。本当に。自分の。創作活動で。作品で。表現をし。「生活をしていますか？」
「人の心をつかんでいますか？」

武満徹さんの、この「芸術的価値と経済的価値は同等でなければならない」という言葉に今現代を生きている芸術家たちは真剣に耳を傾けなければならない。芸術を殺すのは人、芸術を生むのも人。今、現代において、作品を売ることを諦めている人は芸術家ではない、この武満徹さんの言葉からそういうことも読み取れる。だから売る努力をしなければならない。売れるものを作るのではなく、売る努力をする。そのために教育していくことが非常に重要なのだ。だから芸術家は感覚を走らせ、頭を回転させ、自らの声で語り、ペンを走らせなければならない。それも芸術家の仕事である。そして芸術は殺してはいけない。また芸術に従事する者たちも殺してはならない。そういう社会にしなければならない。だが、そういう社会でないのならば、各々が自力で道を開拓する以外に生きる道は決して生れない。

（こにし・てつろう　本会理事）
タイトルロゴ・挿絵：前川久美子（日本出版美術家連盟　賛助会員）

電子楽器レポート・連載 17

日中電子オルガン交流音楽

—上海音楽学院に見る中国の電子オルガン界—

研究：阿方　俊

6 月 23～26 日、上海音楽学院で「日中電子オルガン交流音楽週間(China-Japan Cultural Week for Electronic Organ）が催された。これを機に同学院を訪問し、急速に進む中国経済に負けず劣らず発展している高等教育機関の電子オルガンの一端を垣間見ることができた。日中とはいっても、準備期間が短かったこともあり、参加者は上海音楽学院と昭和音楽大学関係者で、昭和音大からは、内海源太講師、卒業生の千葉祐佳、藤代敏裕、五十嵐優、楠田しおりと筆者であった。その姿を日本との比較を交えながらレポートしたい。

写真は、音楽週間の立て看板前で芸術監督を務めた朱磊（チュウ・レイ）現代楽器・打楽器科長（左）と筆者のスナップ。
ここでは、日中交流コンサート、公開練習、記念講座（阿方　俊、朱磊）、特別セミナー（内海源太）、電子オルガン教育に関する情報交流会、リングウェイ（中国製電子オルガン）のデモンストレーションと試弾会などが行われた。

まず日本との比較で挙げられることは、電子オルガンの教員や卒業生の欧米でのキャリアアップであろう。上海音楽学院ではここ 10 年、電子オルガンの講師や卒業生が欧米の音楽院や音楽大学でパイプオルガンを本格的に勉強している。

・朱磊（チュウ・レイ）現代楽器・打楽器科長：サバティカル（有給休暇）を活用してニューヨークのコロンビア大学で2年間パイプオルガン音楽を研究し、昨年帰国。その後も現代楽器・打楽器科の科長を務めている。

・呉丹（ウー・タン）講師：英国リーズ音楽学院でパイプオルガンのマスターを取得。帰国後は上海音楽学院講師や中国最大規模のパイプオルガンが設置されている上海東方芸術センターなどで演奏活動を行っている。

・張琦（ジャン・キ）卒業生：南カルフォルニア大学でパイプオルガン修士取得。2008 年、世界最高の情報発信機関で NHK などでも紹介され有名になった TED (Technology, Entertainment, Design)に出演した数少ない音楽家の１人。

これらの人たちは電子オルガンの祖先にあたるパイプオルガンを欧米で本格的に学んだ後､そのエッセンスを電子オルガン教育に還元しようとしている｡また来年は､エレクトーン・インターナショナル大会入賞者で中国を代表する演奏家の曾夢（ツェン・モン）講師が訪問教授として半年間の来日を予定している。残念ながら、日本ではこのようなダイナミックなキャリアアップはほとんど見られない。

次に挙げられるのは、吟飛科技社の電子オルガン、リングウェイである。この中国産の電子オルガンは、大型機種が 30 万円、小型の普及機種が 10 万円程度で販売されており、電子オルガン普及の観点から期待されるもの。

かつての日本でエレクトーンの普及に成功した要因に、子どもから成人に至る教室展開、教材や雑誌を含む出版活動、アマチュアから指導者認定のグレード展開、国際コンクールを含む演奏活動などの需要創造活動があった。電子オルガンの先進国であった欧米諸国は需要創造を積極的に行わず、この楽器は衰退してしまったが、中国ではこの二の舞を踏まない姿勢を貫いているようだ。頂点活動として、上海、天津、星海音楽学院など主要音楽学院電子オルガン科への備品としての導入や国際リングウェイコンクールの実施が目立つ。コンクールの内容は、課題曲や自由曲に加え初見や即興演奏も加えた総合音楽力を審査するものとなっている。筆者が参観した第 1 回目のコンクール（2008 年、福建省厦門市）の即興の部は、映像を見ながら即興演奏するというユニークなものであった。また同時に講師研修会が並行して行われていたのも印象的だったが、これらは日本ではみられないものである。

期間中、いろいろな形で日本（エレクトーン）と中国（リングウェイ）の新しい共存を追求する試みが行われた。写真左のデュエットは、エレクトーン（左）を上海音楽学院に留学中の入谷麻友さん、リングウェイ（右）を曹洁琼さんが演奏。写真右は左側 3 台のエレクトーンを楠田しおり、藤代敏裕、千葉祐佳さん、右側 3 台のリングウェイを李娜、白哲尓、徐頴さんが演奏し、五十嵐優さんが指揮をした。

電子オルガンが誕生して 80 年が経つ。この間電子オルガンはソロ楽器として普及してきたが、他楽器と同様にアンサンブルや伴奏の分野も忘れてはならない。このコンサートでは、聴衆の反応からみて、それらの楽しみを改めて示すことに成功した。また電子楽器はピアノなどと違って、機種毎に音色設定の仕方が違うため、他社の楽器をすぐに弾くことができなく複数の会社の楽器によるアンサンブルはほとんど見ることはない。その意味で今回のコンサートは、国や楽器メーカーを超えた新しい方向性を示したものとして意義深いものといえよう。

（あがた・すぐる　本会 研究会員）

邦楽コンサート聴き歩き

作曲：高橋 雅光

＜現代邦楽黎明期の概要＞

現在では、「邦楽」といっても、伝統音楽の世界から現代音楽の世界まで幅広くあり、内容も楽曲表現も多種多様な作品群がある。

戦前までの「邦楽」の作曲作品は、宮城道雄のように演奏家が作曲をすることが多かったが、（洋楽系の作曲家の中ではごく一部ではあるが清水脩・平井康三郎のように、意識的に作曲を試みる人もいた。）戦後、家元制度の枠を超えて、新しい「邦楽」の可能性を求めていた若い演奏家グループに「邦楽四人の会」（１９５７年発足＝会員の菊池悌子氏が参加）の活動があった。この会が先駆的な意味を持つのは、洋楽系の作曲家に作品を依頼し、伝統的な邦楽とは異なる新作を積極的に演奏し、邦楽の新たな可能性を切り開いたことである。

この活動の背景には、戦後の民主主義社会への変化が、若い人たちの希望と可能性を精神的に押し広げた成果がある。

「邦楽四人の会」はアンサンブル作品の新作演奏を中心に活動を開始したが、それに呼応した作曲家は、藤井凡大・清瀬保二（元本会代表委員）・牧野由多可・間宮芳生等がおり、洋楽系の作曲家を中心に“邦楽の現代化”の役割を、邦楽系の演奏・作曲家、中能島欣一・沢井忠夫等と共に果たしてきたのである。その後「東京尺八三重奏団」の活動をへて、さらに打楽器・琵琶・三絃・指揮者等も含めたアンサンブル団体「日本音楽集団＝１９６４年創設」の活躍があり、洋楽系の長澤勝俊・三木稔が座付き作曲家として参加して現代邦楽を盛立てた。

これらの活動の後方支援として、忘れてはならないのは「ＮＨＫ邦楽技能者養成所」の教育機関の存在である。邦楽演奏家として洋楽系の作曲作品（五線譜）が受け入れやすくなったのは、この教育機関の影響が大きい。

本会代表理事のわれらの助川敏弥氏が伝統楽器を使用した作品を発表するのはこの後である。

＜邦楽コンサート聴き歩き＞

今月（７月）はドルチェ邦楽合奏団グループと、公益社団法人日本尺八連盟埼玉県支部の演奏会及び、現代邦楽に多大な貢献をして１昨年他界された作曲家三木稔氏のメモリアルコンサートを聴いた。

ドルチェ邦楽合奏団グループとは、千葉を拠点として東京・神奈川・埼玉の尺八・箏・十七絃の編成からなる邦楽合奏団の総称である。

今回は東京邦楽合奏団の第十一回定期演奏会を７月５日（土）日本橋劇場でゲストに馬頭琴という胡弓にも似た楽器を演奏するアヨーン・バト・エルデネ氏と詩吟

の栗林霜心氏、それに小・中学生１５名からなるジュニアを迎えて、多彩なプログラムで満員の聴衆の熱気と共に盛り上がった演奏会になった。
　このグループを主宰する（公社）日本尺八連盟会長でもある坂田誠山氏は、昨年東京文化会館大ホールを満員の盛況でコンサートを行った実績を持ち、「邦楽って楽しい？もちろん！」を合言葉に、多くの人に聴いて頂くためのアイディアを出し、精力的に準備と動員活動を行っている。
　坂田氏は上記“現代邦楽黎明期”の後半位に演奏活動を始められた方なので、現代の作品を演奏することがいかに大切なことであるのかがよくわかっているのと同時に、それを聴いて頂く（邦楽の楽しさを知って頂く）方々を増やしていく（普及する）ことの大事さをよく理解しているので、聴衆動員には大きな力をかけている。
　それと、邦楽界も高齢化が進んでいるので、若い人たちを積極的に育てようということで「ジュニア＝小中学生」達を大人の演奏に交えて参加させることにより、満員の聴衆に聴いて頂き、大きな拍手をもらう経験を通じて“邦楽”の楽しさを成就してもらう。これらの経験が後年子供たちに生きてくるような邦楽普及活動を行っている。
　それにしても、「詩吟」と「馬頭琴」の演奏は素晴らしかった。「詩吟」の音楽的表現のすごさを再認識したコンサートであった。

　第３７回（公社）日本尺八連盟埼玉県支部演奏会が東京邦楽合奏団の演奏会の翌日、７月６日（日）川越西文化会館（メルトホール）で行われた。
　全プログラム２２作品中１４作品が現代邦楽作品で、古典本曲合わせて８作品という組み合わせ。現代作品の中には、独奏・重奏もあるが、箏・十七絃を含めた大合奏もあり、コンサート全体を通じて、華やかなコンサートとなった。
　このコンサートを指導しているのが、支部長の眞橋鳳山氏で、副支部長の大川礼峰山氏・小松崋山氏や千島舟静山氏、幹事の方々の緊密な協力と運営により、充実したコンサートになった。特に耳目を引いたのは、南稜高等学校の生徒による現代邦楽作品の演奏（吉崎克彦作曲「妖精」＝箏・十七絃による３重奏曲＝５名で演奏）であった。演奏経験が２～３年という話であったが、集中力のある良い演奏であった。こういう若い人たちの意欲的な演奏も取り込みながら、経験豊富な埼玉県支部の方々による充実したコンサートになった。
　私が作曲した「筑後川詩情」（箏群は柴田つぐみ社中）も演奏された。

三木稔メモリアルコンサート

　すみだトリフォニー大ホールで７月１３日（日）、一昨年他界された作曲家三木稔氏の遺言「１公演で三つのレクイエム＝弦楽合奏・邦楽合奏・ソリスト２名と混声合唱とオーケストラ＝を演奏する」を実行するかたちで行われ、熱の入った演奏に、ほぼ満席の聴衆を堪能させ、作曲者の功績を偲ばせた。

（たかはし　まさみつ　本会出版局長）

CMDJ 2014年オペラコンサート
『愛の悲劇再び』

２０１４年９月２５日（木）　18:30 開演
すみだトリフォニーホール　小ホール
主催：日本音楽舞踊会議／月刊『音楽の世界』

《ごあいさつ》

本会のオペラコンサートは2005年12月から始まり。今回で第９回目を迎えます。今年は前半に『艶やかな歌の競演』というサブタイトルのもとで、ソロコンサート、後半は2011年のオペラコンサートで上演され、ご好評をいただいたビゼー作曲の『カルメン』を、装いを新たに再演いたします。『カルメン』は、初演時においては、台詞（セリフ）を含むオペラ・コミック様式で演奏されました。今回もオペラ・コミック様式に近づけ台詞を挟んだ様式で上演しますが、歌唱部は原語（仏語）、台詞の部分は日本語を採用しました。前半のソロコンサート、後半の『カルメン』ともども、来場した皆様のご期待に沿えるよう、出演者、スタッフ一同精進を重ねてまいりました。台本も2011年時の反省をもとに修正を加えました。きっと、皆様の胸を熱くする舞台作りが出来ると思いますので、楽しみにしていただきたいと存じます。

日本音楽舞踊会議	代表理事	助川敏弥、深沢亮子
	理事長	北川曉子
	公演局長	北條直彦
	コンサート実行委員	浦　富美
		中島 洋一（文責）

《プ ロ グ ラ ム》

【前半】『艶やかな歌の競演:オペラ･アリア＆歌曲コンサート』

カタラーニ	歌劇『ワリー』より	“さようなら、ふるさとの家よ”
Catalani	Opera [La Wally] ~	“Ebben? Ne andrò lontana”
プッチーニ	歌劇『蝶々夫人』より	ある晴れた日に”
Puccini	[Madama Butterfly] ~	“Un bel dì vedremo”

歌：佐藤 優衣（ソプラノ）

プッチーニ　歌劇『マノンレスコー』より
“柔らかなレースの中で”、“一人寂しく捨てられて”
Puccini　[Manon Lescaut]~
“In quelle trine morbide”,　“Sola, perduta, abbandonata”
歌：高橋 順子（ソプラノ）

ヴェルディ　歌劇『リゴレット』より　“麗しき御名”
Verdi　[Rigoletto]~　“ Caro nome che il mio cor”
プッチーニ　歌劇『トゥーランドット』より　“氷のような姫君の心も”
Puccini　[Turandott]~　“Tu che di gel sei cinta”
歌：村上 貴子（ソプラノ）

デュパルク　歌曲　“フィディレ”　、　“前世”
Duparc　“Phidylé”　,　”La vie antérieure”
歌：笠原 たか（ソプラノ）

チレア　歌劇『アルルの女』より　“フェデリーコの嘆き”
Cilea　[L'Arlesiana] ~　“Il lamento di Federico”
プッチーニ　歌劇『トスカ』より　星は光ぬ”
Puccini　[Tosca] ~　E lucevan le stelle”
歌：土屋 清美（テノール）

---------- 休憩 ----------

《後半》 ジョルジュ・ビゼー『カルメン』（縮小版）

Georges Bizet　[Carmen]

（歌唱：フランス語、台詞：日本語　〈日本語台本：中島洋一〉）

《配　役》

カルメン：藤長 静佳（メゾ・ソプラノ）／ドン・ホセ：三木 佑真（テノール）
エスカミリオ：品田 広希（バリトン）／ミカエラ：三井 清夏（ソプラノ）
フラスキータ：今野 絵理香（ソプラノ）／メルセデス：富永 珠末（ソプラノ）
ジプシーの女 A：村上 貴子（ソプラノ）／ジプシーの女 B：佐藤 優衣（ソプラノ）

ピアノ伴奏：亀井 奈緒美（全演目）／司会：佐藤 光政（バリトン）

演出：島 信子／企画・構成・音響：中島 洋一

《演奏者プロフィール》

佐藤 優衣（さとう・ゆい：ソプラノ）
岩手県出身。国立音楽大学演奏学科声楽専修卒業。
在学中、“経種廉彦プレゼンツ～学部生オペラ primo raggio による Cosi fan tutte¯” でドラベッラ役を演じる。後にソプラノへ転向。
ヴェリズモオペラの巨匠であるナッツァレノ・アンティノリ氏のマスタークラスを受講し、アンティノリ氏の強い奨めによりこの秋からイタリアへ留学予定。これまでに佐藤峰子、澤畑恵美、L.リッツィ、G.パンツァの各氏に師事。

高橋　順子（たかはし・じゅんこ：ソプラノ）
千葉県市川市出身。高等学校3年の時に岡部多喜子教授に師事する。
武蔵野音楽大学声楽科卒業。
大学、同大学院に在学中、菊地初美教授、故ロドルフォ・リッチ氏に師事。同窓会主催による千葉県新人演奏会に出演。
現在岡部多喜子教授のもとでイタリア歌曲、イタリアオペラ、日本歌曲を中心に勉学、演奏活動している。
日本音楽舞踊会議 会員。

村上 貴子　（むらかみ・たかこ：ソプラノ）
香川県立坂出高等学校音楽科卒業、国立音楽大学声楽科卒業、
同大学院オペラコース修了。二期会オペラ研修所 48 期本科修了。
大学院オペラ「ドン ジョヴァンニ」にツェルリーナで出演。
2006 年３月 CMDJ フレッシュコンサートに出演。2007 年 CMDJ オペラコンサートの『セヴィリャの理髪師』にロジーナ役で出演。
これまでに、田口興輔、菅家美保子、小牧まり、木村明昭、の各氏に師事。二期会準会員。

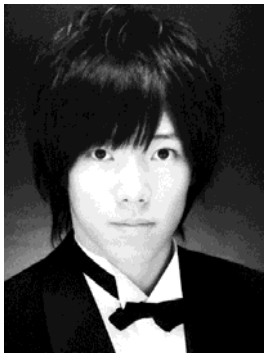
笠原 たか（かさはら・たか：ソプラノ）
国立音楽大学楽理科及び東京藝術大学別科声楽科卒業。ドイツケルン音楽大学３年留学。帰国後ソロリサイタル、ジィントリサイタル、オーケストラとの共演等行う。サリーオペラに所属しアメリカ、ロシア、京都にて数々のコンサートにソリストとして出演。２０００年よりイエルク　デムス氏と共に東京、京都、福岡、ザルツブルクにおいて１０回以上にわたりソロコンサートを開催し好評を博す。デムス氏と共に５枚のＣＤもリリースしている。ウィーンフィルのメンバーとは２回にわたって共演。２０１１年には京都芸術祭において京都市長賞を受賞。日本音楽舞踊会議　正会員。

土屋・清美（つちや・きよみ：テノール）

日本大学芸術学部音楽学科卒。
藤原歌劇団オペラワークショップ研究科修了。国枝誠也・河本喜介、マダム.バダールの各氏に師事。1980年、フランス音楽コンクールに於いてフランス総領事賞受賞、藤原歌劇団創立40周年記念演奏会、「カルメン」「ラ・ボエーム」のロドルフォ「椿姫」のアルフレード、ほか日本のオペラ「春琴抄」「天守物語」など、多数のオペラに出演。その他サロンコンサートに数多く出演。
95年より穂高絵本美術館森のおうち「歌と語りのコンサート」にレギュラー出演。蓼科高原三井の森　ハーモニーの家・高原芸術祭にも毎年出演。03年12月横浜市開港記念会館にてリサイタル。03年12月CD「静けさに歌う」をリリースする。2005年CMDJオペラコンサート『カルメン』の、ドン・ホセ役で出演。2009年CMDJオペラコンサートに出演。日本音楽舞踊会議・日本オペラ振興会・日本演奏連盟各会員・若き芸術家協会（YAA)副代表。

藤長 静佳（ふじなが　しずか：メゾ・ソプラノ）

国立音楽大学声楽学科、同大学院声楽専攻オペラコース修了。東京藝術大学別科声楽専修修了。二期会オペラ研修所マスタークラス修了。サントリーホールデビューコンサート「レインボウ２１」、「二期会新進声楽家の夕べ」に出演。オペラ「フィガロの結婚」（ケルビーノ）、「コシ・ファン・トゥッテ」（ドラベッラ）、「秘密の結婚」（フィダルマ）、「こうもり」（オルロフスキー公爵）、「リゴレット」（マッダレーナ）、「ヘンゼルとグレーテル」（お母さん）等に出演。また、ベートーベン「第九」、ヘンデル「メサイア」、モーツァルト「ハ短調ミサ」「戴冠式ミサ」「ミサ・ソレムニス」「ヴェスペレ」「ドミニクス・ミサ」、バッハ「ロ短調ミサ」、カンタータ等のアルトソリストを務める。佐藤峰子、久岡昇、寺谷千枝子、加賀山和香の各氏に師事。二期会会員。



三木佑真（みき・ゆうま：テノール　）

愛知県名古屋市出身。
平成23年国立音楽大学演奏学科声楽専修を卒業。26年同大学大学院音楽研究科修士課程声楽専攻(オペラ)を修了。同大学院オペラ『Cosi fan tutte』にFerrando役で出演。本年4月日本音楽舞踊会議主催CMDJフレッシュコンサートに出演。声楽を田中淑惠氏に師事

三井 清夏（みつい・さやか：ソプラノ）

国立音楽大学演奏学科声楽専修卒業、及びオペラ・ソリストコース修了。同大学大学院音楽研究科声楽専攻オペラコース修了。
大倉由紀枝、古市善子の各氏に師事。
長野県新人演奏会、国立音楽大学大学院新人演奏会に出演。同大学主催大学院オペラ「ドン・ジョヴァンニ」ツェルリーナ、翌年「コジ・ファン・トゥッテ」デスピーナにて出演。第87・88回二期会オペラ研修所コンサートに出演。二期会オペラ研修所第５５期マスタークラス修了。
二期会会員。

品田 広希（しなだ・ひろみち：バリトン）

新潟県小千谷市出身。新潟県立小千谷高校卒業。国立音楽大学演奏学科声楽専修卒業、オペラ・ソリストコース修了。国立音楽大学コース修了演奏会、卒業演奏会、第82回読売新人演奏会出演。サントリーホール・ブルーローズにて日本経営クラブ主催「若い音楽家を励ます会」創立50周年コンサートに出演。国立音楽大学国内外奨学生として草津夏期国際音楽アカデミーを受講。東日本被災地、老人ホームでの演奏や幼稚園から中学校までのスクールコンサートを行う。五十嵐郊味、佐藤峰子、久保田真澄、Giuliana Panzaの各氏に師事。オペラ・ユニット「Men´s nann@n」メンバー。
今年10月25日文化庁委託事業、平成26年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業
P.マスカーニ作曲　オペラ「友人フリッツ」にダヴィッド役で出演予定。

今野 絵理香（こんの・えりか：ソプラノ）

国立音楽大学演奏学科声楽専修卒業。同大学院修士課程声楽専攻オペラコース修了。
東京二期会オペラ研修所第56期マスタークラス修了。修了時に優秀賞受賞。成績優秀者による、『二期会新進声楽家の夕べ』に出演。
『多摩フレッシュ音楽コンサート2013』にて、最優秀賞（第一位）受賞。受賞者リサイタルとして、自身初となるソプラノ・リサイタルを開催。
オペラでは、《フィガロの結婚》伯爵夫人役、《コジ・ファン・トゥッテ》フィオルディリージ役、《ラ・ボエーム》ミミ役、ムゼッタ役、《愛の妙薬》アディーナ役、《電話》ルーシー役で出演。その他、ベートーヴェン作曲《交響曲第9番》ソプラノソリスト他、様々なコンサートに出演。
これまでに、曽我榮子、佐藤ひさら、岩見真佐子の各氏に師事。東京二期会会員。

富永 珠未（とみなが・たまみ：ソプラノ）

国立音楽大学卒業。現在二期会オペラ研修所マスタークラス在籍。
これまでに坂井洋子、佐藤ひさら、立花敏弘の各氏に師事。

亀井 奈緒美（かめい・なおみ：ピアノ）

東京音楽大学ピアノ演奏家コース卒業。
在学中より蓼科高原音楽祭に参加、室内楽を学ぶ。
第3回吹田音楽コンクール・ピアノソロ部門入賞。
家永ピアノオーディション合格者披露演奏会、国際芸術連盟主催ガラコンサート、日本音楽舞踊会議主催「アンサンブルの夕べ」「オペラコンサート・シリーズ」などに出演。
深澤亮子、弘中孝、佐藤由紀子、竹尾聆子、雄倉恵子、小田美津子の各氏に師事。現在、ソロ演奏、室内楽、オペラ、合唱伴奏など幅広く活動している。日本音楽舞踊会議 会員。

佐藤光政（さとう　みつまさ：バリトン＆司会）
1966 年東京芸術大学音楽学部卒業。1973 年第 7 回パリ国際音楽コンクール入賞。同年、第 42 回日本音楽コンクール声楽部門第 1 位入賞。1990 年《春琴抄》でフィンランドのサヴォリンナ・オペラフェステヴァルに参加。第 18 回ジロー・オペラ賞受賞。1994 年に 2 枚組 CD『佐藤光政　日本の杼情を歌う』を発刊。2000 年に、『日本の名歌を歌う』を発刊。2005 年から始まった CMDJ オペラ公演において、ずっと司会役および重要な役を担当し、公演の中心存在として出演し続けている。
磯谷威、大槻秀元、柴田睦陸、河本喜介の諸氏に師事。二期会、日本オペラ協会、日本音楽舞踊会議、各会員。

☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆

《曲目解説　中島　洋一》

《前半》『艶やかな歌の競演:オペラ･アリア＆歌曲コンサート』

カタラーニ　　歌劇『ワリー』より　“さようなら、ふるさとの家よ”
アルフレード・カタラーニ(1954-1893)は、プッチーニより 4 歳年上のイタリアの作曲家でドイツ・ロマン派の影響もみられる。38 歳の若さで没したため残された作品は多くはないが、『ワリー』は『ローレライ』とともに、彼の代表作である。
“さようなら、ふるさとの家よ”は、このオペラの第一幕で、父に恋人との愛を拒絶され、意に沿わない結婚を強要されたワリーが「それなら私は遠いところへ行くわ」と悲しみを込めて歌う情感に満ちたアリアである。ホ長調 3/4（アンダンテ・ソステヌート・モルト）アリアの最後の部分では彼女の悲しみ情は高まりホ短調となり終わる。このアリアはこのオペラ中で最も有名なもので、コンサートで単独で歌われることも多い。

プッチーニ　　歌劇『蝶々夫人』より　　“ある晴れた日に”
日本を題材にした『蝶々夫人人』はジャコモ・プッチーニ(1858～1924)の書いた代表作の一つであり、**“ある晴れた日に”**は、この作品中で、最もよく知られたアリアである。
ピンカートンが帰ってくることを疑う女中のスズキに、蝶々夫人は、あの人は必ずアメリカから私のもとへ帰って来る、信じなくてはいけないと歌う。「ある晴れた日に一筋の煙が上がり、いとしい夫の乗った船が入港し、夫はまた私を可愛い奥さんと呼んでくれるだろう」。　彼女が望んだとおり、ピンカートンを乗せた船が現れるが、彼は新しい夫人を同伴している。そして、悲劇が起こる。

プッチーニ　　歌劇『マノンレスコー』より
“柔らかなレースの中で”、“一人寂しく捨てられて”

『マノンレスコー』は、同じ題材で書かれ高い評価を受けていたマスネの『マノン』を意識して書かれた作品で、台本についても注文が多く 6 人の手を煩わしている。1893 年に

初演されているが、この作品の成功により、プッチーニの名はイタリアのみならず、国際的にも知られるようになった。。

“柔らかなレースの中で”は、マノンが第２幕：財務大臣ジェロンテの妾宅にて歌うアリア。ジェロンテの妾となった、マノンは「柔らかなレースに覆われた、黄金作りの寝台。そこには沈黙だけがある。」と贅沢だが愛のない生活のむなしさを嘆く。（モデラート　コンモート　変ホ長調 4/4）

“一人寂しく捨てられて”は、第４幕でアメリカのニューオリンズの荒野をさまようマノンが疲弊して一歩も動けなくり、自分の死期を悟って歌うアリア。（ラルゴ　変イ長調 2/4）「ああ一人残された荒野の女！ああ死にたくない」と歌うところでは、テンポが速くなり、彼女の恐怖と絶望の情が表現される。彼女が「愛しい人助けて」と歌うと、恋人デ・グリューが戻って来る。

ヴェルディ　　歌劇『リゴレット』より　“麗しき御名”

ユーゴの原作をもとに書かれたオペラ『リゴレット』が、オペラ作家としのジュゼッペ・ヴェルディ（1813-1901）の名を不動のものにした傑作であることはいうまでもない。
この歌劇において、ヴェルディはレチタティーボを廃し、切れ目なく連なる音楽の表現力で、ドラマチックな緊張感を持続させる、彼独自のオペラ手法を確立した。

“麗しき御名”は、学生に変装したマントヴァ公爵に愛をうち明けられたジルダが、すっかり公爵の虜になり「私のいとしい人の名、忘れえぬ名」と歌うこの作品中唯一のソプラノのアリアである。アリアは、ホ長調 4/4 でゆったりしたテンポで歌い始められるが、次第に高まって行くジルダの感情を、高度な声楽的技巧を用いて表現するように書かれているため、きらびやかな美しさをもつが、かなりの難曲となっている。

プッチーニ　　歌劇『トゥーランドット』より　“氷のような姫君の心も”

トゥーランドット姫の物語を題材にした『トゥーランドット』は巨匠の最後の作品となったが、プッチーニはオペラ化するにあたり、自我の強いトゥーランドット姫とは対照的な、自己を犠牲にして愛する男を救う、女奴隷リューを創出している。

“氷のような姫君の心も” は第３幕で、捕らわれたリューが死を前にして、トゥーランドット姫に向かって悲痛な想いを込めて歌うアリアである。「氷のようなあなた様も熱い炎に打ち負かされてこの方を愛するようになられましょう！」と歌い、もはや逃げられないと悟ったリューは、衛兵の短剣を抜き取り、我が胸を刺し命を絶つ。

デュパルク　　歌曲　“フィディレ”　、　“前世”

アンリ・デュパルク（1848-1933）は、ドビュッシーより 16 歳年長でありながら、彼より 15 年長生きするほど長寿であった。しかし、若くして作曲の筆を絶ち、多くの作品を自ら破棄したため、残された作品の数は少ない。しかし、わずか 20 曲足らずの歌曲は、珠玉のフランス歌曲作品として、現代でも広く歌い継がれている。

“フィディレ”　は 1882 年にコンド・デ・リルの詩に作曲した歌曲。原曲は変イ長調 4/4：「草は柔らかく眠りを誘う」と静かに歌い始めるが、詩の変化にともない、音楽はドラマチックに展開して行く。ピアノも細かい音符を刻むようになり、「しかし、日が輝く曲線をくだり」と歌う段では、声が f に達する。作曲者の瑞々しい感性が溢れ出た佳品である。

“前世”は 1884 年、彼が 36 歳の時、ボードの詩に作曲した作品で、彼が最後に書いた歌曲作品といわれている。日没の陽の光に照らされ移り変わって行く風景に、詩人の魂の歌を重ねた壮大な作品である。バスの持続音を背景にゆったり歌い始めるが、伴奏がうねる波のように躍動して行くにつれ歌のパートも昂揚して行く。元のテンポに戻り歌が最後の段「私を憔悴させる苦い秘密を。」を歌った後、ピアノだけが長く残り、消えるよう曲を閉じる。それはあたかも、この作品を最後に作曲の筆を絶ったデュパルク自身のの魂のつぶやきのようである。原曲は変ホ長調 4/4。

チレア　　歌劇『アルルの女』より　　“フェデリーコの嘆き”

フランチェスコ・チレア（1 865-1950）は、『アルルの女』や『アドリアナ・ルクヴルール』などの作品で、当時はレオンカヴァッロやマスカーニらに続くヴェリズモ・オペラの旗手として評価された。いまは当時ほどでの人気はないが、彼のオペラ作品は、今日でも上演される機会はそれほど少なくはない。

『アルルの女』は、ビゼーの劇音楽と同様、ドーテーの原作にもとづいている。**〈フェデリーコの嘆き〉**は, アルルの女に心を奪われた主人公のフェデリーコが、周囲から反対され、恋の悩みを深め、安らかに眠ってしまいたいと歌うアリア。ヘ長調 6/8 で歌い始めるが、「私は眠りたい」と歌う個所から、ホ短調 4/4 に変わり、音楽は情熱的に高まって行く。イタリアオペラならではの旋律の美しいアリアで、豊かな声量と、長音が歌い続けられる呼吸法を身につけた歌手が歌えば、聴衆を堪能させる力を持つ曲である。

プッチーニ　　歌劇『トスカ』より　　星は光ぬ”

歌姫トスカと画家カヴァラドッシの悲劇の愛を描いた『トスカ』は、『ボエーム』、『蝶々夫人』、並ぶプッチーニ中期の三代傑作の一つである。この作品は 1899 年に完成し、初演は 1900 年 1 月 14 日、ローマのコスタンツィ劇場で行われている。

“星は光ぬ”は第 3 幕で、カヴァラドッシが歌うアリア。脱獄した友人を匿った罪で捕らえられた彼は、看守に指輪を与え手紙を書く許しをえる。そして想い出に耽って歌う。（ロ短調、拍子は 3/4 だが時折 4/4 に変拍する）呟くように歌い始めるが、次第に感情が昂ぶって行き、歌い終わると、感情を抑えきれなくなり、顔を手で覆って泣き出す。カヴァラドッシの張り詰めた気持ちが聴き手に伝わって来る胸をうつアリアである。

《後半》 ビゼー　カルメン （縮小版）

ジョルジ・ビゼー（1838～1875）は、19 才でローマ大賞を受賞するなど、早くから作曲家として頭角を表し、25 歳のとき作曲した歌劇『真珠採り』でオペラ作曲家の地位を確立する。『カルメン』はメリメの小説をもとに、アンリ・メイヤックとリュドヴィク・アレヴィが台本を書いた。1875 年パリのオペラ・コミック座で初演された当時は、台詞（セリフ）を含むオペラ・コミック様式で書かれたが、ビゼーの死後、友人の作曲家エルネスト・ギローがセリフの部分をレチタティーボに書き直し、そちらの方が普及したが、最近では台詞を含むオリジナル版で公演する機会も増えて来ている。本会の公演も、台詞を含むオ

ペラ・コミック様式に近い様式で公演する。ビゼーは『カルメン』の初演から三ヶ月後、静養中にリュウマチという持病を持ちながら川で水浴びをしたことが原因で、36 才という若さで、この世を去った。

★第一幕《セビリャのタバコ工場前の広場》

電子オーケストラで、前奏曲 B（死の主題）が奏され、女の悲鳴と雷鳴が響き、司会者が舞台に登場する。司会者の解説が終わると、休憩を告げる鐘が響き、今は煙草工場で働いているカルメンが他の女工をともなって登場し、「恋は、言うことときかない小鳥。誰も飼い慣らすことなんか出来ない」と歌い出す。有名な**″ハバネラ″**である。歌い終わると自分に興味を示さないホセに対して、むしろ彼女の方が興味をいだき、ホセに向かって花を投げつける。ドン・ホセがそれを拾うと、ミカエラが現れる。ミカエラはドン・ホセの母からことづかってきたと言って手紙とお金を渡し、口づけをする。そしてドン・ホセとミカエラは**「二重唱」**を歌う。ドン・ホセは「きっとお母さんの言うとおり、君をお嫁にもらうよ。あんなジプシー女なんかに興味はないさ」と言い、ミカエラと別れる。

司会者が、その後の出来事を短く説明し、第一幕を終わる。

★第二幕《リーリャス・バスティアの酒場》

″ジプシーの歌″　ホ短調　３／４

カルメンがフラスキータ、メルセデスとともに歌い踊る。

歌い終わると、フラスキータとメルセデスが、勇敢で格好のいい闘牛士、エスカミリオの噂話をしていると、お目当てのエスカミリオが入ってくる。

″闘牛士の歌″ヘ短調→ ヘ長調　4/4

始めはエスカミリオが一人で歌うが、長調に入って二度目の「トレアドル」の歌詞が現れるところから、カルメン、メルセデス、フラスキータが唱和する。歌い終わるとエスカミリオはカルメンに話しかける。二人で短いやりとりをした後、エスカミリオは退場。舞台が暗くなり、司会者が再び登場し、その後の展開を手短に説明する。再び、舞台が明るくなると、そこにはドン・ホセがいる。ドン・ホセはそろそろ兵営に帰らなければならない、と言うと、カルメンは「帰りたければ帰ればいいわ。折角身銭を切ってサービスしてやったのに」とむくれる。ドン・ホセは「俺だって帰りたくないさ。お前を強く愛しているんだから」。カルメンが「お前の言葉なんて信じないよ」吐き捨てるように言うと、ドン・ホセは胸からしおれた花を取り出し、「お前の投げたこの花を営倉の中でも決して手放なかった」と、カルメンに対する想いを歌う。**″花の歌″**

結局、ドン・ホセは兵営には帰れなくなり、カルメンに口説かれ、カルメンたちの密輸団の仕事を手伝うこととなる。

★第三幕《山の中の荒れ地（密輸団の仕事場）》

カルメンは夢中でトランプ占いをしている。フラスキータ、メルセデスも占いに加わっている。**三重唱とカルタの歌**　しかし、よいカードを引き当てる二人とは対照的に、カルメンが何度こころみても、出て来るのは死のカードばかり。

カルメンたちが去ると、ミカエラが姿を見せる。ドン・ホセを捜して堅気の若い女など決して訪れるはずがないこんな場所にまで辿り着いたのだ。どんなことがあってもドン・ホセを連れて帰ろうと、想いをこめて彼女は歌う。**〝ミカエラのアリア〟**

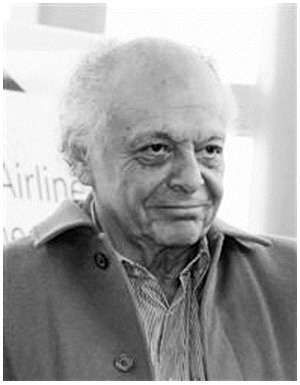
銃声が鳴り響き、ドン・ホセとエスカミリオが現れる。ミカエラは隠れて様子を見る。二人はカルメンをめぐって争っている。そこにカルメンたちが来て止めに入る。そして、物陰に隠れていたミカエラも姿を現す。ドン・ホセはミカエラを見て驚くが、カルメンはドン・ホセに帰るように促す。しかし、ドン・ホセは拒む。ミカエラはドン・ホセの母が危篤であることを告げる。ドン・ホセとミカエラは連れだって、隠れ家を去って行く。

★第四幕《セビリャの闘牛場の前》

前奏が終わると、カルメン、フラスキータ、メルセデスが姿を現す。フラスキータとメルセデスは群衆の中にホセの姿をみかけたが、危ないから彼に会わないようにと忠告する。カルメンは決着をつけるため二人の忠告を振り切ってホセに会いに行く。

カルメンを忘れることが出来ないドン・ホセは、昔の愛を取り戻そうとカルメンに迫る。**「二重唱と終わりの合唱」**そして、ご存知の展開となる。ここからは、観てからのお楽しみということで、説明は割愛する。

訃報　ロリン・マゼール（指揮者・ヴァイオリニスト・作曲家）



世界的指揮者であるロリン・マゼール氏（1930～2014）が、肺炎による合併症のためアメリカ・バージニア州の自宅で死去した。84 歳だった

氏は、ベルリン放送交響楽団（現ベルリン・ドイツ交響楽団）やクリーブランド管弦楽団、パリ管弦楽団、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団、ニューヨーク・フィルハーモニックなど歴任し、1982 年には、ウィーン国立歌劇場の総監督となっている。日本とも関係が深く、1963 年のベルリン・ドイツ・オペラが初来日した際、カール・ベームに同行し来日している。以後 30 回近く来日しており、2010 年 12 月 31 日、東京文化会館において、ベートーヴェン全交響曲を指揮している。今年も、PMF（パシフィック・ミュージック・フェスティバル）25 回記念コンサート（７月１２日～8 月７日）に首席指揮者として来日して、札幌など日本各地で指揮活動をすることが予定されていたが、健康上の理由から辞退していた。

（編集部）

会と会員の情報

１．ＣＭＤＪ　会と会員のスケジュール

8　月

2日（土）池上英樹マリンバミニコンサート　ピアノ：廣瀬史佳
【14:00～14:45 フジヤマミュージアム　観賞無料】
【20:00～20:45 富士レークホテルラウンジ　観賞無料】

3日（日）池上英樹マリンバミニコンサート　ピアノ：廣瀬史佳
【11:30～12:15 レストラン野の花　富士河口湖町船津　観賞無料】

4日（月）池上英樹マリンバミニコンサート　ピアノ：廣瀬史佳
【10:30～11:15 子どもみらい創造館】【15:30～16:15 日本赤十字病院】各観賞無料

7日（木）８月度定例理事会　【会事務所 19:00】

9日（土）深沢亮子　F.シューベルト・ソサエティー20周年記念コンサート
ピアノ五重奏曲「鱒」ソナチネNo１他　共演:瀬川祥子 (Vn) 永井公美子 (Vn) 田原綾子 (Va) 富岡廉太郎 (Vc) 幣隆太郎 (Cb)　【日生劇場ホワイエ14：00
問合せ フランツ・シューベルト・ソサエティー03-5805-6203】

17日（日）富士山河口湖音楽祭2014　吹奏楽交流コンサート
山梨県中学生特別バンド他　ゲスト出演ピアノ：廣瀬史佳
【14:00河口湖ステラシアター 入場無料】

24日（日）栗栖麻衣子　つぼみの会 夏休み子育て応援コンサート
第1部11:00 あいうえおんがくかい、第2部 13:00 おんがくどうぶつえん、第3部 15:00 かきくけコンサート【熊谷さくらめいと月のホール　500円(未就学無料 要整理券) 通し券あり 問合せ/事務局090-8596-7393(川田)】

26日（火）深沢亮子　モーツァルト　ピアノ四重奏曲No 1 K.478
ベートーヴェン　ピアノ四重奏曲Op16
共演　瀬川祥子 (Vn) 田原綾子 (Va) 富岡廉太郎 (Vc)
【新宿住友ビル7F　朝日カルチャーセンター　13：00
問合せ　朝日カルチャーセンター　03-3344-1945】

28日（木）アウトリーチコンサート (山梨) ピアノ：廣瀬史佳
ブルクハルト・トェルケ (Vn) ベンジャミン・ツィーアフォーゲル (Vn) ベネディクト・ツィーアフォーゲル (Cb)
【午前中:西条小学校　午後:押原小学校　夜:町民向けコンサート】

29日（金）アウトリーチコンサート (山梨) ピアノ：廣瀬史佳
ブルクハルト・トェルケ (Vn) ベンジャミン・ツィーアフォーゲル (Vn) ベネディクト・ツィーアフォーゲル (Cb)　【午前中:常永小学校　午後:押原中学校】

30日（土）ピアノ：廣瀬史佳　フルート:未定 (Fl)
ブルクハルト・トェルケ (Vn) ベンジャミン・ツィーアフォーゲル (Vn) ベネディクト・ツィーアフォーゲル (Cb)
【18:30笛吹市スコレーセンター (山梨) 入場料未定】

31日（日）ピアノ：廣瀬史佳　フルート:未定 (Fl)
ブルクハルト・トェルケ (Vn) ベンジャミン・ツィーアフォーゲル (Vn) ベネディクト・ツィーアフォーゲル (Cb)
【14:00アルコス・アルモニコスホール (山梨) 入場料未定】

9月

8日（月） **9月度定例理事会　【会事務所19:00】**
12日(金)深沢亮子　ウィーンの音楽家と共に
共演：Cエーレンフェルナー（vn）H.ミュラー(va)他
【浜離宮朝日ホール19:00　問い合わせ新演奏家(03-3561-5012)】
13日(土)北川暁子　ピアノリサイタル～オールショパンプログラム～第2夜
幻想曲Op.49　プレリュードOp.28　舟歌Op.60　他
【東京オペラシテリサイタルホール19:00　一般5,000円　学生3,000円
3夜連続券12,000円(サウンドギャラリーのみ取扱い)】
18日（木）池上英樹、廣瀬史佳アウトリーチコンサート
【午前中:一宮南小学校体育館　午後:ケアガーデン風間】
19日（金）池上英樹、廣瀬史佳アウトリーチコンサート
【午前中:境川小学校音楽室　午後:笛吹高校吹奏楽部】
19日（月）**『音楽の世界』編集会議　【会事務所19:00】**
20日（土）音楽の花束　池上英樹･廣瀬史佳　マリンバとピアノコンサート
【笛吹市スコレーセンター】
23日(火）深沢亮子　千葉コンクール本選審査
25日(木）**CMDJ2014オペラコンサート【すみだトリフォニー小ホール(詳細未定)**

10月
4日(土）深沢亮子リサイタル【主催平田市文化会館　プラタナスホール　18：00】
ベートーヴェン・モーツァルト・原田稔・ショパンの作品
7日（火）**10月度定例理事会【会事務所19:00】**
11日(土）深沢亮子　公開レッスン　【瑞浪市　ホワイトスクウエア　15：00】
12日(日）深沢亮子コンサート【ホワイトスクエア14：00お問合せ：0572-68-3143】
19日(日)**『音楽の世界』編集会議　【会事務所14:00～ 】**
23日(木)**20世紀以降の音楽とその潮流　“様々な音の風景　ＸＩ”**
【すみだトリフォニー小ホール(詳細未定）】
26日(日)高橋雅光(公社)日本尺八連盟主催「尺八オーディション審査委員
【京都市男女共同参画センターホール(ウィング京都)】
11月
4日(火）深沢亮子室内楽の夕べ　共演：中村静香（Vn）毛利伯郎（Vc）
ハイドン：ピアノトリオ
ベートーヴェン：ピアノとヴァイオリンのためのソナタ　G-Dur　op.30-3
ドヴォルザーク：ピアノトリオ“ドゥムキー”e-moll op.90
【南麻布セントレホール　19：00　問合せ：日墺文化協会TEL 03-3271-3966】
7日（金）**11月度定例理事会　【会事務所19:00】**
15日(土)**第28回ピアノ部会公演【原宿アコスタディオにて午後開催(詳細未定)】**
出演：原口摩純･小崎幸子･小崎麻美･山下早苗･武居美和子･山上由布子・新井知子
18日(火)**『音楽の世界』編集会議　【会事務所19:00～ 】**
21日(金)**「ＥＬオケによるコンチェルトの夕べ」**
笠原たかSop、広瀬美紀子p（モーツアルト）、戸引小夜子p（グリーグ）、
高橋通（箏の作品）、木下晶人Vn（バーバー）、浅井隆宏p（ブラームス）、
村上貴子Sop(モーツアルト）、寒河江真弓p(ハイドン)
EL:西山淑子、指揮者:寺島康朗【渋谷 ヤマハ エレクトーンシティ19：00】
25日(火）深沢亮子　ベートーヴェン　ピアノとヴァイオリンのためのソナタNo 8
シューマン　ピアノとヴァイオリンのためのソナタNo 1　共演:伊藤 維
【新宿住友ビル7F　朝日カルチャーセンター　13：00

問合せ　朝日カルチャーセンター　03-3344-1945】
25日(火)　原口摩純　レクチャーコンサート
【東洋英和女学院大学横浜校地 10:40～　(年齢男女問わず受講可)2500円
問合せ＆申込み:045-922-9707 主催:東洋英和女学院大学生涯学習センター】

12月

5日(金) **深沢亮子と室内楽の仲間達【音楽の友ホール　19：00開演】**
深沢亮子（pf）恵藤久美子（vn）中村静香（va）安田謙一郎（vc）
助川敏弥　ピアノ三重奏曲　(2011年:初演)（pf、vn、vc）
シューベルト　アルペジオーネソナタ（va、pf）
モーツアルト　ピアノ４重奏曲第一番（pf、vn、va、vc）
7日（金）**１２月度定例理事会　【会事務所19:00】**
14日(金) 高橋雅光：尺八３重奏曲「絆」新作委嘱初演。
（公社）日本尺八連盟広島支部主催「全国演奏大会 in 広島」
【広島上野学園大ホール　13:00開演 3,000円】
18日(金)**『音楽の世界』編集会議　【会事務所19:00～ 】**
20日(土)北川暁子ピアノリサイタル～オールショパンプログラム～第３夜
幻想ポロネーズ Op,61　スケルツォ第４番 Op,54　２つのノクターン Op,62 他
【東京オペラシテリサイタルホール 19:00　一般 5,000円　学生 3,000円
３夜連続券 12,000円(サウンドギャラリーのみ取扱い)】
21日(日) 高橋雅光：尺八と箏・十七絃による大合奏曲「彩の国の旅路」
埼玉邦楽合奏団第１回定期演奏会　【上尾文化センター　13:00（開演）】

2015年

1　月

7日(水)　**新年会【会場未定・18:00～20:00】**
２０１５年度第１回理事会【16:00～17:30】
16日(金) **声楽部会公演　「2015年新春に歌う～夢と希望と、そして・・・」**
【すみだトリフオニー小ホール(詳細未定)】

2　月

4日(水)　**動き、舞踊、所作と音楽　第３回公演 【すみだトリフォニー小ホール】**
7日(木) **２月度定例理事会　【会事務所19:00】**
8日(日) 原口摩純 ピティナトークコンサート ピアノソロ,連弾,ブラームスピアノトリオ
【フィリアホール/横浜青葉台 入場無料　問合せ申込：ピティナ 03-3944-1583】
11日(水・祝) **日本音楽舞踊会議2015年度（第５３期）定期総会**

3　月

5日(木) **邦楽部会第２回演奏会【すみだトリフォニー小ホール】詳細未定**
7日(土) **３月度定例理事会　【会事務所19:00】**
8日(日) 原口摩純ソロリサイタル　ヤマハ銀座サロンコンサート
【お問合せ＆お申込み：ヤマハ銀座店 03-3572-3132】

4　月

7日（日）**４月度定例理事会【会事務所19:00】**
１０日(金) **フレッシュコンサート2015【すみだトリフォニー小ホール詳細企画中】**

5　月

7日（火）**５月度定例理事会　【会事務所19:00】**
14日(木) **作曲部会公演【すみだトリフォニー小ホール詳細企画中】**
16日(土) 深沢亮子コンサート　演奏とお話（曲目未定）

【14：30 開演　お問合せ　東金文化会館小ホール 0475-55-6211】

6　月

８日（月）６月度定例理事会　【会事務所 19:00】

14 日(日) 日本音楽舞踊会議 CMDJ　50 周年記念公演

【上野文化会館小ホール詳細企画中】

7　月

3 日(金) 声楽部会公演「歌い継ぐ童謡・愛唱歌コンサート」

【すみだトリフォニー小ホール午後公演(詳細未定)】

7 日（火）７月度定例理事会　【会事務所 19:00】

会員スケジュールの表示（凡例）について

ゴシック体文字は日本音楽舞踊会議主催（含む、各部会主催）公演予定です。

明朝体文字は会員から寄せられた情報、会関係者が企画、参加して居る事業や公演の情報です。

明朝体太文字は、本会の運営に関わる会議等の予定です。

※「会員から寄せられた情報」等は原文に準じますが、文字数の制限上、項目内容等を変更する場合があります事をお断りします。

２．新 入 会 挨 拶

山上 由布子（やまがみ　ゆうこ　青年会員　ピアノ）

はじめまして。今年度から青年会員として日本音楽舞踊会議の一員となりました。山上由布子と申します。私はピアノを専門に勉強してまいりました。幼い頃はピアノではなくクラシックバレエを習っており、どちらかというと音楽は、バレエを踊りながら聴く、という感覚で、自らが楽器を使って演奏する、という事は考えてもおりませんでした。そのような私が、現在、音楽の世界にのめり込んでいること自体、自分でも大変驚いております。実際、不安を抱えながら入学した大学での音楽生活は、先生方や友達にも恵まれ、とても充実した、有意義な 4 年間でした。卒業しても音楽から離れたくない、ピアノを続けたいという思いで今日までレッスンを続けております。ピアノを練習していて、「今日はここで終わり」ということはあっても、「この曲はこれで終わり」ということは無い、奥の深い世界だということを改めて感じているこの頃です。そのような終わりの無い世界で、この度青年会員になれたことは、自己啓発のためにとても良い機会だと思っております。これから、この会を通して、大勢の音楽の先輩方に出会い、自分の知らない音楽の世界を体感していくことになります。このチャンスを活かして、見たのも、聴いたもの、感じたこと、全てを吸収し、今まで以上に勉強に励み、自分の演奏、音楽を追求していけたらと思います。皆様と交流できることを大変嬉しく感じております。どうぞよろしくお願い致します。

編集後記

梅雨が開けたら、やはり例年のごとく猛暑に見舞われました。書斎の空調機が古くなったせいか、冷房の利きが悪くなり、この暑さには閉口しました。熱中症に気をつけながら、あまり無理をしないようにマイペースで編集作業を行っていたら作業が予想以上に遅れ、編集部の皆様に迷惑をかけてしまいました。ところで、9月25日にはオペラコンサートが開催されますが、前半は5人の歌い手によるソロコンサート、後半は3年前に超満員のお客を集め大好評だった『カルメン』を再演します。キャストは主役のカルメン以外は3年前と入れ替わりますが、前半のソロコンサートともども、熱のこもった舞台となることが期待できると思います。多くの方々のご来場をお待ちしております。ところで乱獲からか、ニホンウナギは最近、絶滅危惧種に指定されたそうですが、今年は昨年より少し安そうです。懐具合のよい方はうなぎでも食べて、この暑さを乗り切られたら如何でしょうか。私の懐具合はそれほど良くないので、目下思案中です。　　（編集長：中島洋一）

本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福　島	福島大学生協	024-548-0091
千　葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東　京	オリオン書房外商部	042-529-2311
	㈱紀伊國屋書店　和雑誌ｱｸｾｽｾﾝﾀｰ	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック㈱	03-3813-6751
	全国学生生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
	㈱ジュンク堂書店　東京外商部	03-6457-7049
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静　岡	吉見書店	054-252-0157
愛　知	正文館書店外商部	052-931-9321
	㈱東海図書館サービス	052-501-0263
大　阪	㈱ﾔﾏﾊﾐｭｰｼﾞｯｸ大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
	㈱ジュンク堂書店　外商本部　大阪支社	06-4693-8210
兵　庫	㈱ジュンク堂書店　外商部	078-262-7794
京　都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖　縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

編集長　：中島洋一　副編集長：橘川 琢　高橋 通　湯浅玲子
編集部員：新井知子　浦 富美　栗栖麻衣子　小西徹郎　高島和義　高橋雅光
戸引小夜子　北條直彦

音楽の世界 8/9 月号(通巻 561 号)
2014 年 8 月 1 日発行　　定価 500 円(本体 462 円)
発行人：芙二　三枝子
編集・発行所　日本音楽舞踊会議　The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN
〒169－0075 東京都新宿区高田馬場 4－1－6　寿美ビル 305　Tel/Fax:(03)3369 7496
HP：http:// cmdj1962.com/　　E-mail：onbukai@mua.biglobe.ne.jp
http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/　（アーカイブ）
A/D：音楽の世界編集部 Tel: (03)3369 7496　印刷：イゲタ印刷㈱ Tel: (04)7185 0471
購読料　年間：5000 円　（6 ヶ月：2500 円）　振替 00110－4－65140（日本音楽舞踊会議）

＊日本音楽舞踊会議会員会費の中に、購読料が含まれております
＊乱丁、落丁がございましたらお取替えします